

「波の中の二人」

古世ふるせ

映多えいた

登場人物表

新田俊也	としや	(6)	(6)	(8)	無職
室井紗香	さやか	(2)	(9)		元 看護師
新田澄江	すみえ	(3)	(0)	(回想時)	俊也の母
多恵		(6)	(6)	(回想時)	俊也の祖母
剣崎貢		(3)	(5)		偽物プロダクション代表
黒川勝也		(3)	(2)		剣崎の手下
立石守		(2)	(3)		剣崎の手下
剛田		(2)	(1)		暴漢野郎
細石		(2)	(1)		暴漢野郎
杉下		(4)	(8)		ホテルの支配人
引田		(3)	(2)		リサイクルショップ店員
俊也の叔父		(2)	(8)	(回想時)	声のみ

あらすじ

元々生きる価値の薄いまま年老いた俊也は、生きる気力を失い僅かな所持金を手に、ワゴン車で、死の旅に出る。

冥土の土産に、大好きなDVD映画を再度観続け、日本の風景のビジュアルを頭に詰め込みながら、所持金が尽きるまで、ワゴン車で海沿いを旅する。最後に逝き着こうと想っている所は、太平洋の果てに在るといいう、良いマチ世界だった。

死への旅 初日に、海を眺める俊也に、六十年前の光景が、死の世界を意味する良いマチ世界という言葉が、母の無残な姿が、痛烈に蘇って来る。

老人の域に入る俊也は、この死への旅に、連れなど想像もしていなかった、しかし旅の2日めの映画館で、妙な女性、紗香と出遭ってしまふ。紗香は何故か？淑やかな女性言葉と、ギャルっぽい女の子言葉を使い分け、俊也に話しかけて来た。俊也は異様な雰囲気紗

香と接する気は無かったが、妙な成り行きから、ワゴン車での生死の旅を承諾してしまう。

死望老人と薬物オンナ。

二人の旅路に、様々な、色波が渦巻く。

二人が辿り着く世界は……？

○街のデイスカウトショップ・店内

新田俊也（66）が、中古のDVD映画のトールケースを3本、手に取りレジに向かう。

レジのテーブルにDVD映画を並べる。
邦画の「五番町夕霧楼」と「ゴジラ」
洋画の「ブルーベの恋人」のタイトルが見える。

店員「この3本のDVDで、宜しいですか」
俊也「ええ…それで…」

力なく頷く俊也。

○デイスカウトショップ店の外

レジ袋を下げた俊也が、デイスカウトショップ店から出て来る。

街が広がっている。

俊也の空しい眼に、その街が広々とした海と成り、大きな波音が押し寄せて来る。

× × ×

爽やかな朝日、オレンジ色の海。

× × ×

照りつける太陽、青い海。

× × ×

白く霞んだ月、黒い海。

タイトル

『波の中の二人』

○真っ暗な画面

字幕

— 俊也は、死の世界に行くのに、連れ

など、想像もしていなかった……

しかし—

○ボロアパートの前

軽トラックが停まっている。

荷台に液晶テレビ、冷蔵庫、洗濯機等
が積みまれている。

○同・アパート部屋内

家具の無く成ったガラシとした部屋。

マスクを掛けた俊也が、同じくマスクをしてるリサイクルショップの店員

引田（32）から、お金を受け取っている。

俊也「七万八千二百円？こんなものかな」

引田「これでも高く買い取った心算ですよ」

俊也「そうだな、安物ばかりにしては、高く買って貰ったのかも、しれないな」

引田「新田さん、部屋の物を全部引き払ってしまつて、これから、どちらの方に住まわれるんですか？」

俊也「…遠くかな…」

引田「遠くつて、外国ですか？」

俊也「…いや、違う…：異世界だよ」

引田「ええっ！異世界つて？…？？」

○アパート脇の駐車場

停めて在るワゴン車。

後部席が倒され、大きな段ボール箱が三つ並んでいる。箱の開きかけた蓋から、本やDVD映画が食み出している。運転席と助手席の間に台が設置され、台上に後部席に向かって、取り外し可能なノートパソコンが配置されている。後部席に乗り込んで来た俊也、手にしている袋を覗くと、中に一万円札の束が入っている。

俊也「生命金は、八十四万八千円か……」
金を見詰める俊也の、空しい顔。

俊也「母さん、この生命金が尽きたら、母さんが逝いっている、よいマチ世界に、行くから……」

俊也は札束が入った袋を、大型バッグの底に詰め込む。

○雨降る車道

走るワゴン車。

マスクをしている俊也が虚ろな顔で

運転している。

フロントガラスに中途半端な雨が降り注ぎ、振り払うワイパーが、カチ、カチ、カチと、時の経過を刻む。

サイド窓からビル並みが、家並みが、傘差す老若男女の姿が、流れ去って行く。

○同・走るワゴン車

雨やんだ曇り空。

ワゴン車が、千葉県の波乗り道路を走り抜けて行く。

○九十九里浜

海辺。

揺れる波映。

ジッと見詰めている俊也。

押し寄せる波が、紫色むらさきいろ、に映る。

俊也の脳裏に、哀れな母の姿が浮かび上がって行く……

○地方都市（回想）

字幕

— 昭和36年 —

— 母と一緒に、初めて、映画館で映画を観た —

レトロな映画館に掛かる『名も無く貧しく美しく』の大きな看板。

母澄江（30）と幼い俊也（6）が手を繋ぎ、映画館の中に入って行く。

○商店街通り（回想）

通りを歩く澄江と俊也の脇を、ツバメがスーッと通り過ぎる。

俊也「あっ、お母ちゃん、ツバメさん何処に行くの？」

澄江「ツバメさんは、遠い世界に行くのよ」
俊也「遠い世界って？」

道路の果て空間を飛行するツバメが突

然、遠方の木の電柱にぶつかり飛び散る。

俊也「あっ?! : ツバメさん、死んだ! ?」

澄江「ツバメさんは、きつと厭な事が在ったのよ。だから、死ぬ気で打ぶつかったのよ : :」

字幕

— 幼い俊也は此の時感じた。生きているモノは、いつか死ぬ —

○大きな川辺（夕暮れ・回想）

二本の川筋の間に砂地が広がる。

澄江と俊也が、砂利山の天辺に座り込んでいる。

母澄江の眼が、川筋の彼方を見詰め潤うるんでいる。

澄江「俊也、川のずっと先の海が観えるかい」

俊也「あの、ぼやけている所が、海なの?」

澄江「そうだよ、あそこにね、太平洋って云う大きな海が広がっているのよ」

俊也 「太平洋っていう海が在るの？」

澄江 「そうだよ、太平洋の広い広い海原の果てにね、良いマチ世界、っていう所が在るんだよ」

俊也 「よいマチ世界って？」

澄江 「良い世界だよ」

俊也 「好い所なの？」

澄江 「そうだよ、とつても良い世界だよ、だ

から俊也も……一緒にいこうね……」

俊也 「うん！」

字幕

——よいマチ世界、俊也に取って、

一生忘れる事が出来ない言葉、

と成る——

○土手道（夜・回想）

薄暗い川沿いの土手道を、澄江と俊也が手を繋ぎ歩いている。

細い丸太木の先に、ブリキの傘に覆わ

れた裸電球の外灯、侘しい光に数匹の虫が飛び回っている。

外灯に浮かぶ、澄江すみえの虚しい顔。

字幕

――極貧あえに喘ぐ澄江は、小学生に成る

俊也の、ランドセルを買う金が無

かった――

× × ×

手を繋いだ澄江と俊也、斜面を見上げて
ている。

砂利石が積み上げられ壁と成り、その
上に線路が通っている。

澄江の虚しい顔が引き締まる。

澄江「俊也、行くよ」

俊也「何処へ？」

澄江「良いマチ世界だよ」

小岩の間から、一匹のバツタが飛び跳
ねる。

俊也「あつ！ トノサマバツタだ！」

澄江「俊也、急ぐよ！」

俊也「トノサマバツタ捕まえる！」

澄江「！……」

澄江は空しく微笑み、俊也から手を放す。

澄江「そのバツタさん、きっと女の子だよ。」

俊也「……必ず捕まえるのよ！」

俊也「ええっ？ トノサマバツタは、女の子じ

やないよ……？」

× × ×

幼い俊也がトノサマバツタを捕まえる、

その時、薄暗い空間に、列車の凄まじ

いブレーキ音が響く。

俊也の顔色が変わる、一気に砂利石斜

面を駆け上がる。

俊也が斜面に這いつくばり、覗く。

列車の下に、母澄江の衣服が開けた、
白い肉の塊が空しく転がっている。

× × ×

俊也は無我夢中で草木の中を走った。
暗い空間を我を忘れ、走り続けた。

× × ×

疲れ切った俊也の臉に、月明かりに
照らされた、長い川筋が観える。
母澄江の死体が、川の流れに浮かんで
いる幻影。

母、澄江の死体が、遠いボヤケタ海の
空間に流れ消えて行く光景が、フラシ

ユ……（回想終了）

○ビジネスホテルの一室（夜・現在）

部屋内を光が仄かに覆っている。
ベッドの上に黒いノートパソコンが置
かれ、第一作目の『ゴジラ』の映画が
映しだされている。
半身を起こした俊也が、真剣な顔で観
ている。

字幕

—ゴジラは、俊也と同じ年に生まれ

たー

俊也M「：ゴジラは、今も生き続けて居る、
価値の在る怪物：：僕は、今も生き続けて
居る、価値の無い老人：：」

部屋の壁に、優しく揺らぐ光の影。
見詰める俊也の虚しい顔。

○幕張イオンの駐車場

イオンモールアミューズメントの駐車
場に、俊也のワゴン車が止まっている。
駐車場に止まっている車の数が寂しい。
ワゴン車の窓が開放された中、俊也が
後部席に寝ころびながら、本を読ん
でいる。

開け放たれた窓から、男達の顔が覗き
込む。

剣崎「すいませんが、ちょっと聞きたいこと
が在るんで」

顔を上げる俊也。

俊也「えっ？何でしょうか？」

窓越しに、黒いマスクを掛けた3人の男達が立っている。

リーダー格と想える、鋭い目つきに整った顔付きの剣崎貢（35）、巨大な凶体の黒川勝也（32）、質たちの悪そうな若い立石守（23）が並んでいる。

剣崎「この駐車場で、慌てて駆けて行くような女の姿を、見かけませんでしたか」

俊也「駆けて行く女？…とは？…申し訳ないが車から女性が降りる姿も走っている人ひと影も気が付かなかったよ」

剣崎「そうですか」

3人の男達、ワゴン車の中を覗き、見回しながら去って行く。

○映画館内

銀幕上に蒼井優主演の「スパイの妻」が上映されている。

薄暗い客席はガラガラで、人影も疎ら。俊也は前方から3列目の真ん中辺りに

座り、スクリーンを觀賞している。

俊也の横の列の客席は、全て空席。

× × ×

上映中に、バッグを抱えた室井紗香（2

9）が、空席を縫うように来て、俊也が座る席の横に立つ。

紗香「（小声で）オジさん、この席、誰か座って居るの？」

俊也「空いてますけど？」

紗香「そう、じゃ、バッグを、置かして貰うかな」

俊也「バッグって？他に席が空いていますよ」

紗香「私さ、おじさんの隣が好いの」

俊也「僕の隣が良いって…？」

紗香は座席を開いて座らずに、黒い中型バッグを置く。

不意に紗香の声が、淑やかな女性言葉に変わる。

紗香「すいません、少しの間、このバッグを見ていて貰えませんか。お願いします」

俊也「バッグを見ていてくれとは？如何いう事ですか？」

紗香は答えずに、急いで座席の間を通り抜け館内を出て行く。

× × ×

隣の客席にポツンと置かれている黒いバッグ。

薄暗い空間の周りから、男達の小さな声が聞こえて来る。

黒川「此処じゃないですよ、きっと」

黒いマスクをした悪党面の男達が、客席の周りをうろついている。

先程の駐車場での男達。

剣崎「アイツは映画好きだから、映画館に隠れている筈だ」

黒川「姿が無いねから、きっと他の映画館ですよ」

剣崎「そうかも知れないな」

咄嗟に俊也は黒いバッグを、自分の席

の下に隠す。

館内から男達の姿が消えて行く。

× × ×

暗い館内の壁時計が光っている。

俊也M「いったい？何処に行ったんだ？」

席に置かれている黒いバッグに、デ

ジタル式のカギが付いている。

俊也M「このバッグは？何なんだ？」

× × ×

場内をオレンジ色の光が覆っている。

マスクを掛けた客たちは立ち上がり、

次々と場内から出て行く。

客席で俊也が、黒いバッグを見詰めて

いる。

不意に、目の前に紗香の姿。

紗香「あー、バッグ無事だった！： オジ

さん、守ってくれて、ありがとう」

俊也「何処に行っていたのですか？」

紗香「トイレだよ。風邪かな、急に咳が出て

止まもなく成っちゃって、気持ち悪く成っ

ちやて、動けなかつたんだよ。グウオ、ゴホ、ゴホ」

紗香は不自然な咳をする。

滑らかな黒髪は、ウサギの耳の様に二つに束ねられ、口に白い大きなマスクが覆われ、大きな黒縁メガネが餓鬼ばい。まるで変装しているかの様な姿。

俊也「大丈夫なのか？」

紗香「もう、大丈夫だよ、クウオ、クオ、ゴホ、ゴホン」

紗香は、座席の黒いバッグを取るのと同時に、もう片方の手で俊也の腕を

つか掴む。

紗香「おじさん、お礼がしたいよ、クウオ、ゴホン」

俊也「お礼なんて要らないよ」

紗香「お礼がしたいんだよ、コオツ、ゴホン」
俊也「お礼なんか貰うような事はしていない、本当に何も要らない」

館内は何故か、入れ替わりの人間達が

入って来ない、二人だけの世界。

紗香の顔がニンマリとする。

紗香「このバッグの中にさ、薄汚れた奴らに取っては何千万円もする宝が、入っているんだ。それをオジさんが守って呉れたんだから、お礼がしたいんだよ。お礼がアタイの体で好いなら、いくらでもあげるよ」

俊也「何をバカな事を、言っているんだ。一いっ体たいこのバックの中に、何が入っているの？」

紗香「オジさんには関係ない、モノだよ」

俊也「……」

急に、紗香の顔が切ない表情に変わる。

俊也の腕を掴む紗香の手に、悲壮な力が加わり悲痛な声が。

紗香「助けて欲しい！」

俊也「えっ!？」

俊也に、三人の男達の危ない影が浮かぶ。

俊也「それは無理だよ。警察に行った方が良い」

紗香、大きく咳き込み項垂れる様に
座席に手を着く。

絞り出す阿婆擦れ女のような声。

紗香「解つてたよ：無理な事ぐらい。こんな
事を知らないオジサンに頼むような事じゃ
ない事ぐらい：：ゴホン、グウオ、グウオ」
俊也「：：：」

紗香がメガネを外す、美しい顔が現れ
る。

紗香の悲壮な表情から女性言葉が。

紗香「今、私は、死ぬか生きるかの境地にい
ます：：だから私は、貴方に必死に頼んだ
のです：：生きるか死ぬかの思いで：助け
て欲しいと縋すがったのです：：」

× × ×

客席をよろけ乍ら出て行く紗香の後ろ
姿。

立ったまま見詰めている俊也に、虚し
い紗香さやかの声が響く。

≪生きるか死ぬかの思いで、縋すがったつ

たのです！ ≧

俊也、紗香の姿を追う。

○イオンビル内のショッピングモール

色とりどりのマスクを掛けた老若男女が、洒落た店通りを彷徨う。

黒いバッグを持って、眼の先を行く紗香の姿は危なっかしい足取り。

ふら付き咳を撒き散らし、宛ても無く歩いている。

気が付いているのか？ 後ろを振り返る紗香。身を隠す俊也。

行き交う人々は、咳きをしながら夢遊病者の様に歩く紗香を避けながらも、好奇心な目を巡らしている。

突然、紗香が、通りの床に倒れる。行き交う周囲の人たちの驚きの顔が浮かんだ瞬間、俊也が駆け出す。

× × ×

モール内のトイレの前に設置されてい

る長椅子に俊也が、黒いバッグを抱えて座って居る。

紗香がトイレから出て来る。

先ほどの虚ろな顔がウソの様な、頭のウサギ結びを解いた、メガネを外した美しい顔。

紗香はソウシャルディスタンスを無視するかの様に、俊也の横に腰を下ろす。

紗香「本当に、ご迷惑をお掛けしてスイマセ
ンでした。なにか、お礼をしなくては」

俊也「お礼なんていい。それより、もう大丈夫なのか？」

紗香「ええ、もう大丈夫です。暫く、ここで休んで居れば、落ち着くと想います」

紗香、何か考え事をするように天井を少し見上げる。

紗香「あの、お時間、少し大丈夫でしょうか？」

俊也「えっ？ 少し位なら大丈夫だけど？」

紗香「ああ、良かった。話し相手が出来て：

オジサンさ、本を読むのが好きでしょ、それから、映画を観るのも好きじゃない？」

俊也M「何で？急に声色が変わるんだ…？」

紗香「アタイさ、本を読むのも映画を観るのも好きだから、オジサンとアタイ、凄く気が合いそうだよ。きっと体の合性もピツタシだよ」

俊也「何を言っているんだ！？本を読むのも映画を観るのも好きだけど、如何して、ソナな事が判ったんだ？」

紗香「アタイさ駐車場の車の中で、本を読んでいるオジサンの姿を見たんだよ。声を掛けようと思っただけど、オジサン、あまりに熱心に本を読んでいたから、声を掛けられなかったんだよ」

俊也M「この女が、駐車場で僕を見かけたのは、あの男達から逃げている最中だったのだろうか？」

紗香「本を読むのが好きな人は、映画を観るのが好きに決まっているから、絶対に映画

を観に来ると想って、他の映画館も探しちやっただよ」

俊也「他の映画館も探したって？ 如何して、そこまでして、僕を探す必要が在るの？」

紗香がニンマリと微笑む。

紗香「本を沢山読む人は、好い人なんだよ。

おまけに映画を観るのも好きな人間は、絶対に良い人だよ。だから、オジサンを探したんだよ」

俊也「僕は良い人じゃない。だけど、僕が善い人だったら、あの男達から逃げるのに、必要なのか？」

紗香の顔が急に、悲壮にも見える真剣な表情に変わる。

紗香「違います！ ……私が、貴方を必要とするのは ……あの男達から逃げるためでは、在りません ……人間として生きる為にです！」

×

×

×

波音（幻想）

俊也の頭に、黄色い海原が浮かぶ。

不気味な黄色い波が、揺れている。

× × ×

俊也の怪訝な顔（現実）

俊也「人間として生きる為とは？ 良く解らないが？ …… ひとつ聞きたいことが在る。

貴方は如何して、あんな男達から、追われているんだ？」

紗香「それは…ゴホオ、ゴホオ、ゴホオ…」

俊也「…」

激しく咳をしながら、上着のポケットから、紙幣を取り出す紗香。

紗香「すいません、また調子が悪く成りそうなので、この御金で、薬を買って来て貰えませんか。このビル内に薬局が在る筈です。ゴホオ、お礼は、お礼は、必ずしますので如何か お願いします」

紗香は、無理やり紙幣を俊也に手渡す。

お金は、折り畳まれた一万円札。

俊也「お礼は要らないが、薬って、何を？」

紗香「それは、咳止め、咳止め薬をお願いします：ゴホオ、ゴホオ」

× × ×

俊也が、行き交う人たちの間を歩き、薬局を探している。

モール内の薬局店に入って行く俊也。

× × ×

薬を買って戻って来た俊也。

哑然とした顔で、無人の長椅子を見る。

× × ×

周辺のイオンモール内を、探す俊也。

俊也、薬の入った袋の中を覗く。

袋の中に咳止め薬と、八千数百円の釣り。

○駐車場

紙袋を持った俊也が、駐車場に戻って来る。

俊也、気配を感じるように、止めて在るワゴン車の後ろを覗く。

車が停っている路肩と雑草地の間に、
黒いバッグを抱えた紗香がシヤガみ込
んでいる。

紗香「あつ、オジサン！ 奇遇！ この車なの」

俊也「何を見え透いた事を……薬と御釣りな
ら返すよ」

紗香「薬も御釣りも要らないよ」

俊也「じゃ如何して、此処に居るんだ？」

紗香「鎌倉に行きたいから！」

俊也「鎌倉に行きたいって？ 何を言っている
んだ。何で鎌倉に？」

紗香「この車で」

俊也「そういう事じゃなくて、如何して鎌倉
に行きたいんだ？」

紗香「鎌倉が好きだし、オジサンと遊びたい
から」

俊也「！？ 年寄りを揶揄うのは、好い加減
にしてくれないか、貴方を此の車に乗せる
心算は無つもりい」

紗香の表情が変わる。

紗香「ごめんなさい、私は貴方を擲^{から}擲^かう心算^{つもり}なんて、在りません……私は今、帰る家も、此れから先に行くところも在りません。

私は、あいつ等の顔が見えない……遠くに言きたいのです……」

俊也「帰る家がないとは……？しかし、先に言った通り、僕には、あいつ等から貴方を助ける力なんて無い、警察に行った方が良い」

悲壮な紗香の表情。

紗香「……私は、今は、警察に行きません。

私の体と心が綺麗に生った時、必ず警察に出頭して、更生の世界に行きます」

俊也「更生の世界とは如何いう事なんだ？」

紗香「私は、その期間を、3ヶ月と決めました。3ヶ月経っても、私の体と心が綺麗に成らなくて、快樂の未練が残っていたら、私は、警察にも更生の施設にも行きません……私は……死の道を選びます！」

俊也「快樂の未練？死を選ぶ！？とは？
言っている事が、良く解らないが……ひよ

っとして、そのバッグの中には？」

紗香「そうです、三千万円相当の、麻黄まおうを主原料とした化学合成剤、いわゆる覚醒剤が入っています」

俊也「……！ そんな多量の覚醒剤が、入っていたのか？」

紗香「私は、この白い粉を、全部捨てます。

私は自分の体と心の中に在る、死の価値を全て消して、生への価値を見つけ、活なきる価値を創り出したいのです」

俊也「生きる価値を創る？……」

俊也の脳裏に、青い海波が広がる。

× × ×

紗香「お願いです。私を助けて下さい！」

俊也「僕に、貴方を助ける余裕なんて無い」

紗香「映画、好きですよね？」

俊也「映画を観るのは、好きだけど？」

紗香「それで充分です、私を助けるには」

俊也「何を言っているんだ 訳が解らない？」

紗香、元氣よく立ち上がり、俊也に

ニツコリ微笑む。

紗香「オジサン、行くよ。いざ鎌倉へ！」

俊也「何を言っている。この車に乗せるとは、言っていない！」

紗香、悲痛な表情を俊也に向ける。

紗香「私の妄想かも知れませんが、貴方は、最後に死を望む旅をしているのでは、在りませんか？」

俊也「ええっ！？ 如何してそんな事を？！」

紗香「お願いです。私は、命がけで薬物の魔効を消したいのです……本当は、生きていたいのです……貴方と一緒に、生きる価値を見つきたい……この車での生死の旅に、私を連れて行って下さい！」

俊也「本当は生きて居たい！？……」

可愛くも美しくも観える紗香の顔。

俊也M「生きる価値を見つける旅か……？ どうせ死ぬ気なら……二人旅も……」

俊也の脳裏に、青い海波が広がる。

○首都高速道路

走るワゴン車。

流れる、高層ビルの群れ。

助手席に座って居る紗香。

紗香「私の名前は、室井紗香さやかといます。室井さんとか紗香さんとは言わないで、紗香と呼び捨てにして下さい」

俊也「呼び捨てに：」

紗香、声色を変える。

紗香「室井さんとか紗香さん何て呼ばれたらキモイじゃん。そんな他人行儀の呼び方じゃ、アタイの毒消しなんて、到底無理だからね」

俊也「毒消しとは、如何いう事なんだ？」

紗香「毒消しっていうのは、アタイが覚醒剤への未練を断ち切る事だよ……とここでさ、オジサンの名前は、何て言うの？」

俊也「僕の名前か、名前は、新しいと田んぼ

の田で新田にっただ」

紗香「それ、苗字じゃん、名前は、何て言う

の？」

俊也「えっ名前か？ 俊也としやだが？」

紗香「じゃアタイ、女の子ぶっている時は、

俊ちゃんって呼んで、女性を演ずる時は、

俊也さんって呼ぶことにするよ、それで良

いよね、俊ちゃん」

俊也「僕は俊ちゃんに成るのか？ 名前の呼び

方は如何でも良いが：：女性を、演ずると

は？ 如何いう事なんだ？」

紗香「演技をするって事だよ」

俊也「演技をするとは？」

紗香「アタイは、俊ちゃんの前では、色んな

女を演じるよ。ソんな事をするのは、俊ち

ゃんの前だけだよ。若しかすると、それが、

二人に取っての生きる価値を、生むかも知

れないんだよ」

俊也「演技が生きる価値を生むとは？ 如何い

う事なんだ？」

紗香「それは、そのうちに解かるよ：：俊ちや

ん、鎌倉は明日でも明後日でも良いから、

今日は先に秋葉原に行つてよ」

俊也「秋葉原に？何で？」

紗香「この車で」

俊也「…そういう事じゃなくて、何しに、秋葉原に行くんだ？」

紗香「ドン・キホーテとかで、車で生活する為に必要な、日用品を買いたいんだ。それにアタイが着るコスプレは、秋葉原にコスプレショップが在るんだよ」

俊也「コスプレショップ！とは？…室井さ

ん…：ではなくて、紗香さん…いや…紗香、コスプレをかう心算なのか？」

紗香「そうだよ、なんか、問題でも在るの？」

俊也「いや、無いと…思うが…：」

○都内の道路

走っているワゴン車。

紗香「俊ちゃん、アタイさ、高価なお薬が入ったバッグに、大好きな本を数冊入れただけ、着替えのブラジャーとかパンティと

かを持たずに、アイツラから逃げて来たんだよ。だから先ず、洋品店に寄ってよ。他に色違いのジャージを、3着ぐらい買いたいんだよ」

俊也「下着は必要だが……色違いのジャージを、3着も買うのか？」

紗香「そうだよ、俊ちゃんの分も買うよ、二人は何時も御揃いの色のジャージを着て、旅を楽たののしまなきや生けないんだよ」

俊也「僕は年寄りだ、何で若い紗香と御揃いのジャージなんか、着なければイケないんだ。僕の分まで買う必要は無いぞ」

紗香、女性言葉で。

紗香「私たちは、身も心も一つに成らなければ、困難の波に飲まれてしまいます。だから、ジャージぐらいは、御揃いの物を着て、身も心も一つに生りたいのです。毒消しは、生易しいものでは在りませんから……」

俊也「毒消しというのは、そんなに大変なモノなのか？」

紗香、真剣な表情。

紗香「大変です。薬物依存症である私に襲う幻覚は、人間の理性を狂るわせませぬ。私は猛獣の様に成るかもしれませぬ……」

俊也「猛獣に……」

俊也の脳裏に、うねる赤い波。

○秋葉原・ドン・キホーテ・ビル

紗香と俊也が両手に、大きな紙袋を下げて出て来る。

○秋葉原・コスプレショップ店内

マネキン人形に着せられた、着物コスプレを眺めている二人。

江戸時代の小料理屋のお姉さんが、着ている様な着物コスプレ。

胸に褌掛けの模様が入り、まるで女性剣士が戦いに挑むような浴衣風着物にも観える。

俊也「紗香、メイドコスプレと宇宙人コスプレも買っているんだぞ、他に、この時代劇コスプレも買う心算なのか？」

紗香「そうだよ、生きる価値を創り出すには、衣裳も大事だからね」

俊也「衣裳が大事とは？」

俊也「そうかも知れないが……」

紗香、嬉しそうな声で。

紗香「これを買ったら、次の店に行くぞ」

俊也「えっ、次の店？ 未だ何か買う心算なのか？」

紗香「カメラを買うんだよ」

俊也「カメラって？ スナップ写真を撮るなら

スマホで充分じゃ無いか」

紗香「カメラはカメラでも、ビデオカメラを買いたいんだよ」

俊也「ビデオカメラって？ 何でそんなものを、買うんだ？」

紗香「それはさ、お金で、買うんじゃない」

俊也「……」

○秋葉原・街通り

秋葉原色の人並みが流れている。

俊也と紗香が並んで歩いている。

○カメラ屋・店内

ショーケースの中に、中型の業務用ビデオカメラ。

俊也「これは、業務用ビデオカメラじゃ無いのか」

紗香「そうだよ、業務用ビデオカメラの方がカッコイイじゃん」

俊也「これを買う気か？」

紗香「買う気だよ」

俊也「紗香が御金を出すのだから、とやかく言っても、しょうがないが、三十万円以上も、するじゃないか」

紗香「これは二人が生きる為の出費だよ。あ

とは、三脚とか編集ソフトとかも買うよ」

俊也「三脚と編集ソフトも買うって？…紗香、ひよっとして？…映画でも創る気なのか

…？」

紗香がメガネを外し、優しい笑みを浮かべる。

紗香「そうです、二人が納得する映画を創りたいのです」

俊也「ふたりで映画を？創るのか？」

紗香「俊也さんと私は映画が大好きな筈です。

二人の心が一つに生って、時間と空間を切り取る世界に、実像と虚像が葛藤する空間に立ち向かえば、必ず生きる価値が、見出せると想っています…（不意に声色が変わる）創るぞ！ふたりだけの映画を…」

俊也M「ふたりで創る映画に、生きる価値が？生まれる、か？…？」

○コインランドリーの駐車場

ワゴン車の後部席。

買った日用品類、衣類にコスプレ服、本とDVDが詰まった大きな段ボール箱3ツ、新しく買った紗香のバッグ、

俊也のバッグ等を紗香が眺めている。

俊也「衣類ケースとカーテンを買って、本棚も買うのか？」

紗香「このワゴン車の中で、うら若き乙女と死近き御年寄りが、同棲生活を始めるんだよ、車の中を、快適な居住空間にしなきゃ、ダメじゃん」

俊也「そうだな、僕は死近き年寄りだな……同棲生活か……だけど紗香、車の中に必要な物を買うのだから、お金は僕が出すよ」

紗香「お金は僕が出すよって、俊ちゃん何を間抜けな事を言っているんだ。此れから二人が向かう先は、苦難の波が連続して待ち構えて入るんだよ。二人が一心同体に生つて、お金も共同で分かち合わなければ生けないんだよ。地獄の路もカネ次第だからな。もう大してないけど、明日、アタイの御金を銀行から下ろして、俊ちゃんに全部、渡すから、此れから先の会計は任せるよ」

俊也「えっ？お金を僕に全部渡すって？紗香

そんな事をして大丈夫なのか？」

紗香「大丈夫か大丈夫じゃないか何て問題じゃないよ。バッグの中の薬物は、雨の日の夜に、人知れない山の奥に全部捨てるとしても、アタイが御金を持っていたら、マタ覚醒剤に手を出しちゃうじゃないか。お金さえ持っていれば、薬物は意外と簡単に手に入るよ」

俊也「覚醒剤は、簡単に手に入るのか！？」

俊也の脳裏に、真っ黒な海波が渦巻く。

○道路脇の空き地（夕方）

俊也のワゴン車が停まっている。

衣装ケースやカーテン材料、簡易本棚等でゴチャゴチャに成っている。

座り込んだ紗香が衣類を畳みながら、ケースに仕舞っている。

寝るスペースの無い後部席を、眺める紗香。

紗香「俊ちゃん、今夜は荷物が沢山在って、車の中では眠れそうも無いから、ホテルを頼もうよ」

俊也「それは良いが、今から予約なんて取れるか？」

紗香「鎌倉じゃなくて、藤沢辺りならキツと取れるよ。アタイが電話するから、俊ちゃんのスマホ貸してよ」

俊也「僕のスマホを？」

紗香「アタイのスマホは、今は、あまり使いたく無いんだよ」

俊也「僕の携帯を使うのは構わないが、紗香が予約を取るのか」

紗香「そうだよ、アタイは俊ちゃんより全然若い手下だし、ヒツジの様な仕事は、私がするしかないじゃん」

俊也「何だソレハ、紗香は僕のヒツジなのか？」

紗香「そうだよ、アタイは俊ちゃんのヒツジを努めるから、俊ちゃんは、アタイの毒消

しを頼むよ」

俊也、ポケットからスマホを取り出す。

俊也「それは、頑張るよ」

紗香「アタイはヒツジだ！…という事で、俊

やん、ジヨデイ・フォスター主演の映画

『羊たちの沈黙』は、チャンと観たか？」

俊也「如何いう繋がりなんだ、『羊たちの沈

黙』は、チャンと観たし、段ボール箱の中

に、DVDも入っているよ」

紗香「流石は映画好きの年寄りじゃん」

俊也「年寄りは余分だ」

○同・ワゴン車の中（夕方）

紗香がスマホを手にして、女性言葉で

電話を掛けている。

紗香「その部屋は無料WiFi大丈夫ですか

…42インチの液晶テレビが在るのです

か…じゃ、ツインルームでお願いします」

俊也「えっ？ツインルームを？」

俊也の小さく驚く声。

紗香「…はい、新田俊也と申します…：そう
です…：」

紗香はスマホの送話を切って、ギャル
言葉で。

紗香「俊ちゃん、無料W i F i付きで、大型
テレビ付きの部屋が取れたよ」

俊也「紗香、ツインルームの部屋を頼んだの
か？」

紗香「そうだよ。それが何か問題でも在るの
か？」

俊也「いや…：別に無いと思うが…：」

○夜の街道

走るワゴン車。

街中の夜の外灯が、寂しく流れて行く。
後部座席で紗香が、D V D映画を並べ
て、眺めている。

紗香、段ポール箱に、区別されている
感じで、袋に入れられている2本のD
V D映画を取り出す。

邦画の『五番町夕霧楼』と洋画の『ブルーベの恋人』が出て来る。

紗香「俊ちゃん、何で？ 邦画の『五番町夕霧楼』と洋画の『ブルーベの恋人』が区別して、仕舞って在るんだ？」

運転しながら俊也。

俊也「その2本の映画は、特別な想いが在るからかな。生きている内に、もう一度必ず観たいと思っている映画だよ」

紗香「この2本に、特別な思入れが在るのか？ 佐久間良子さん主演の『五番町夕霧楼』は、美しい女性と情けない男との心中物語だから、死ぬ間際に観たいのは解かるよ。だけど、クラウディア・カルディナーレ主演の『ブルーベの恋人』は心中物語じゃないよ」

俊也「ああ、解かっている。だけど『ブルーベの恋人』は必ず、もう一度観たい映画なんだよ、それより紗香、今日観る映画は決まったのか？」

紗香「今夜観る映画は、とっくに決まってるよ」

俊也「そうか、それで何の映画を観る気なんだ？」

紗香は後部席から、DVDトールケースを持ち、手を伸ばし、運転席脇に翳す。

紗香「これだよ」

チラッとタイトルを観る俊也。

俊也「おっ、『ミザリー』じゃないか」

紗香の声が女性言葉に変わる。

紗香「そうです。キャシー・ベイツ主演の映画、ミザリーを観たいのです。私は今夜でこの映画を観るのは六回目に成ります。私は、ミザリーのキャシー・ベイツの演技に圧倒され、演技派女優に成りたいと思ったのです」

俊也「ミザリーのキャシー・ベイツの演技を観てか……解かる様な気がする……」

紗香「……」

紗香、DVD映画『ミザリー』の表紙
絵を感慨深めに見詰める。

紗香、ポケットから一冊の文庫本を取
り出して、DVD映画ケースの上に載
せる、文庫本は太宰治の『人間失格』。
『人間失格』のタイトル文字が大きく
浮かぶ。

本のタイトル文字から紗香の目が、ワ
ゴン車の隅に置かれている、黒いバッ
グに移る。

紗香の表情は、覚醒剤の入った黒いバ
ッグに未練を残しているのか？ 薬物
依存者に成ってしまった自分を悔いて
いるのか？ 紗香の情けない顔が、黒い
バッグを見詰める。

○ホテル・ツインルーム内（夜）

バスルームの音、俊也が先に入ってい
る。

コンセントにビデオカメラの充電器、

スマホの充電器が差し込まれている。
緑色のジャージ姿の紗香が椅子に座わ
り、慣れた手付きでノートパソコンの
操作をしている。

画面に、Web上からダウンロードし
た、著作権の切れた小説の本文の文章
が映しだされている。

太宰治の小説『道化の華』だ。

凄いスピードで文字を追う紗香。

× × ×

ノートパソコンからHDMIを通じた
配線が繋がれ、映画ミザリー、の画面
が、大型テレビから流れている。

それぞれのベッドの上で、パジャマ姿
の紗香が半身を起こした姿で、俊也が
体を倒した姿で観ている。

俊也「紗香ひよつとして、この映画を観て看
護師に成ろうと想ったのか？」

紗香「…そうかも知れない」

俊也「如何して、女優の道を断念したんだ：

あつ：余計な事を言ったか……」

紗香「女優の道を断念したのは、気が付いた通りだよ、あいつ等の所為だよ。こんな状態で、女優なんか目指せる訳ないし、仕事も出来ないよ」

俊也「……」

○同・室内（夜）

天井の照明は落とされている。

ベッドの照明の中、うつ伏せに成って本を読んでいる紗香。

読んでいる本は、太宰治の『人間失格』
紗香の眼つきが、可笑しく成っている。

○同・ホテル（夜）

薄暗いベッドルーム。

静けさの中に、ガサガザという音。

ベッドの時計の針が、深夜2時過ぎを示している。

目を開ける俊也。

隣のベッドに紗香の姿が無い。

玄関方面から、ガサガサという音が響
びいている。

× × ×

薄明りの中。

玄関ドア前で、俊也のバッグを覗き込
み、何かを探している紗香。

俊也「紗香、何を遣^やっているんだ？」

虚ろな紗香の目が、俊也を観る。

紗香「ああー、劍崎さん、薬が切れたの……

薬は何処に在るの？」

俊也「紗香？…何を言っているんだ？ 僕は、

劍崎という人間じゃないぞ？」

不意に、紗香の形相が狂鬼に変わる。

紗香「お前だよ、お前が私をケダモノに変え

たんだよ！薬は何処に在る！出せ！」

俊也「如何したんだ紗香！？…此処に薬な
んか無い！薬物は使わせない！」

俊也の顔を見詰める紗香の目は、放心
状態。

紗香「あれっ？あなた誰ですか？……あつ、
お客さんですか？ 薬と私の体を買いに来
た、お客さん？ ……お願いです、薬を
持っていたら、分けて下さい……」

俊也「私の体を買いに来た、お客さんとは？
！ 如何いう事だ？」

紗香の顔が急に晴れやかに成って、女
の子、言葉に。

紗香「あれっ？俊ちゃんじゃないか？アタイ
をホテルに連れ込んだのか？？俊ちゃんさ、
ちよつと、車の鍵、貸してよ」

俊也「紗香、正気なのか？ 真面な人間に戻
るんじゃ無かったのか？ そんな幻覚状態
の人間に、車の鍵も薬も渡せない！」

紗香の表情が一瞬で、阿婆擦れオンナ
に。

紗香「偉そうに言うな！ 老い耄れ爺が！ 薬
は私の物だ、お前の物じゃない！ ジジイ
車の鍵は何処に在る！」

俊也「僕は、ジジイだから、忘れた」

紗香、狂気の形相に変わる。

紗香「ふざけるな！ 老い耄れが！」

紗香、猛獣の様に、俊也に飛び掛かって来る。

床に押し倒された俊也の首を抱える、
紗香。

狂鬼の腕力で、俊也の首を絞めつける
紗香。

藻掻き苦しむ俊也。

俊也「うっ、うっ、うっ」

紗香「…死にたいのか…： 私の薬は何処だ！

？ 出しな！…： うー…： うー…」

紗香、不意に、苦しむような唸り声を
上げて俊也から手を放す。

紗香「うっ、うー…：」

紗香の口から吐物。

口に手を当てながら、バスルームに駆
け込む紗香。

へたり込んでいる俊也、大きく息を吸
い吐き出している。

バスルームから、紗香が吐いている呻うめき声が聞こえる。

× × ×

ベッドで俊也が仰向けで、天井を見詰めている。

紗香がバスルームから出て来て、隣のベッドに座り込む。

悲壮な紗香の顔。

紗香「すいませんでした……」

俊也「謝る事は無い、僕は紗香の口から、幻覚で猛獣の様に生るかも知れないと聞いているから、覚悟はしていたよ」

紗香、枕元に置いて在る文庫本、「人間失格」のタイトル文字を見詰める。

紗香「(ポツリと) ……私は…人間…失格ですね……」

俊也「それを克服する、旅路じゃないのか」

紗香「私は此れから先も、俊也さんに、どんな危害を加えるか判りません……それでも、一緒に旅をしても良いのですか？」

俊也「今更何を言い出すんだ。僕は紗香との生死を賭けるといふ旅に、承知をしたんだ。コンナことぐらいで、一人旅に切り替える心算は無いよ」

紗香「でも…私は、俊也さんを死ぬ目に遭わせるだけではなく、殺してしまいかもしれないですよ。それでも、本当に大丈夫なのですか？」

俊也「大丈夫だ、僕の旅は元々、死を意識しているし、それに僕は、幼い時から何回か、死ぬような目に在っているよ」

紗香「幼い時に、死ぬような目に遭っているって？ 如何どういうことですか？」

俊也「それは…人に話せるような事じゃない…」

紗香「私は聞きたいです、死ぬような目に遭ったんだから、悪い話じゃないと思うけど…」

俊也「そうだ、悪い話では無い…」

紗香「…薬物依存者の私が言える立場では

ないかも知れませんが……私は俊也さんと、苦楽を共にしたいのです……」

俊也「苦楽を共に……！」

紗香「今、話したくなければ、今じゃなくて良いです」

俊也「いや、暗い話だが、紗香に聞いて貰いたくなった……昼間に海を眺めながら、ゆっくりと話すことにするよ……」

紗香「それじゃ……海は……鎌倉の海に行って貰えませんか」

俊也「鎌倉の海とは？」

紗香「鎌倉に行きたいと言ったのは、鎌倉の七里ヶ浜を観たかったのです」

俊也「鎌倉の七里ヶ浜を観たいとは？ 何か在るのか？」

紗香の表情が、悲壮にも生き生きとし

た顔にも観える。

紗香「死の海が在ります」

× × ×

波の音が響く。

○街中・京東銀行の駐車場

俊也のワゴン車が停まっている。

後部席に座り込んだ俊也が、ビデオカ

メラを前に、説明書を観ている。

車のドアが開く、紗香の顔。

紗香「俊ちゃん、全部、下ろして来たぞ」

俊也「全部寄越して、本当に大丈夫なのか？」

紗香「全部渡さなきゃ、アタイは、薬を直ぐ

手に入れてしまうから、薬物依存から抜け

出せないじゃないか」

俊也「そうだな、そういう事だったな」

紗香「はいよ」

紗香、お金の入った銀行袋を、俊也に

手渡す。

紗香「カメラとかコスプレを買ったから、4

2万5千円しか残っていなかったよ」

俊也「それで充分だ」

紗香「俊ちゃん、その御金を入れたら、持ち

金は幾らに成るんだ？」

字幕

— 二人の生命金、117万2千円也 —

○街中の道路

走るワゴン車、運転している俊也。

後部席の壁に、器用な手つきで道具を使い、突っ張り棒や軽板を利用した本棚を固定していく紗香。

本やDVD映画を並べて、ゴムバンドで倒れないように、工夫を凝らしていく紗香。

紗香、覚醒剤の入った黒いバッグを、気づかれないように疎ツと手に取り、開ける。

バッグの中には、別の厚みのある紙袋が入っている。

紗香は新しく買った小型バックの中に、その袋を隠す。

○七里ヶ浜

海岸線沿いの有料駐車場に、停まって

いるワゴン車。

後方の134号線では、車が引っ切り無しに走り、その内側に江ノ電が走っている。

車の座席から、見詰めている俊也と紗香。

フロントガラスの眼前に、七里ヶ浜の海原が一望できる。

紗香「俊也さん、パソコンの画面を観て下さい」

紗香、ノートパソコンを抱えて、俊也に渡す。

覗く俊也。

画面に、文字がギツシリと並んでいる。太宰治の書いた小説『道化の華』の本文が映し出されている。

紗香「冒頭に、ここを過ぎて悲しみの市、と書かれてあります、この悲しみの市とは、鎌倉の事で、本文中に出て来る袂ヶ浦は、現在の此の七里ヶ浜あたるに充まはちはずです」

真剣な紗香の顔。

俊也「太宰は、此の海岸で心中を計ったのか？」

紗香「そうです、道化の華という小説は、七里ヶ浜での、太宰と女性の実際の心中を基にして書かれています。心中という道化に因^よって実際に、18歳の田部シメ子^{たなべ}という女性が死んでいます、しかし、太宰は生き延び、小説家として華が咲きます」

俊也「それは酷い話だな、太宰は、犯罪者と
言っても良いくらいだ」

紗香「その事は、小説の中でも現実でも警察に依って、太宰は、自殺幫助罪か殺人罪に該当するかの、取り調べを受けています」

俊也「どう成ったんだ？」

紗香「太宰は狂人ということで、自殺幫助罪に成ります」

俊也「狂人とは？如何いう事なんだ？」

紗香「狂人とは私が勝手に言い表した言葉ですが、太宰は心中時に、精神的にオカシカ

ツタことが理由で自殺幫助罪に成り、殺人罪を免れます」

俊也「太宰は、精神的にオカシカッタ事が理由で、殺人罪を逃れたのか？」

紗香「当時太宰は、パピナールという麻薬性鎮痛剤を可成りの量で服用していて、モルヒネも使用していたのです。薬物中毒症の私から言わせれば、これ等の薬を多量に服用すれば、痙攣発作の症状が現れ、精神的に可笑しくなることは想像できます。頭の悪い当時の太宰が其れを知らない訳は無いのに、苦痛から逃れるために、薬物という快楽に溺れたのです……」

少し気が高ぶっている紗香。

紗香「アルコール依存症や薬物依存症の太宰は、自分が人間失格者だと、自覚していた筈です……私も自覚していません、違法薬物依存症の今の私は、人間失格者だという事を……」

俊也「薬物を断ち切れれば良い事じゃないか」

紗香「そんなに簡単じゃない事は、俊也さん

も目の当たりにしたでは、ありませんか……」

俊也「そうだが、頑張るしか無いじゃ無いか」

紗香「私は、人間止めますか？其れとも薬を

止めますか？かと問われれば、人間に戻り

たいと答えます……でも私は……人間を断ち

切る可能性も在ります……」

俊也「……」

暫く黙ってしまふ二人。

○同・七里ヶ浜の海辺

浜辺に並んで座って居る二人。

俊也の話を真剣な顔で、聞いている紗香。

勢いよく押し寄せる波、引いて行く波、

紗香と俊也の声が響く。

紗香「……お母さんは、お金に困った挙句に、

幼い俊也さんを道連れにして、列車に飛び

込もうとしたのですか？」

俊也「そうだ……しかし結果は、今話した通り

…母は一人で、よいマチ世界に逝ってしまつたよ…」

紗香「死ぬほど生活に困っていたのに、お母さんは、実家とか親類とかに、お金の無心を願う事が、出来なかつたのですか？」

俊也「母の実家は、叔父が事業を展開していて結構裕福だった。そこには当時、祖母も健在だったよ」

紗香「じゃ、何故？ お母さんは、お金の無心に行かなかつたのでしうか？」

俊也「プライド、だと想っている」

紗香「プライド！？」

俊也「母は女子学校にも行き、青春時代は御嬢さんとして育つたと聞いている。惨めな生活を、言い出せなくて死を選んだと、想像している…」

紗香「お母さんの…プライドが…死を選んだ…」

× × ×

荒巻く海波。

× × ×

紗香「俊ちゃんは、バツタを捕まえた事で命が助かったんだな……」

俊也「そうだ、あの時、トノサマバツタが飛び出して来なかったら、僕の命は無かったかも知れない……」

紗香「そのバツタさん、きっと女の子だよ。」

俊也：：必ず捕まえるのよ！、お母さんの言った、その言葉、俊ちゃん、チャンと守ったじゃないか」

俊也「そうだな、だけど捕まえたトノサマバツタが、女の子か男の子かは判らないな」

紗香「何を言っているんだ、俊ちゃんが、実際に捕まえたバツタは人間で、しかも、淑やかで美しい女性じゃ無いか！」

俊也「ええっ？淑しとやかで美しい女性とは？」
思わず俊也、横に座る紗香の顔を見る。

紗香、女性らしい品ひんを創り微笑む。

俊也「そうだな、確かに、淑しとやかで美しい女性を捕まえたのかも知れないな……？」

× × ×

青い海波が、寄せる。

× × ×

紗香「…俊也さんは…今でも、お母さんが言った、その、よいマチ世界、という存在を信じているのですか？」

俊也「ああ、信じている、死んだ世界が好い^よ世界でなければ、母も祖母も僕も浮かばれないからなあ」

海波を見詰める紗香の表情が、ニヤリとする。

紗香「信じる者は救われないカモだな。けど、その得体の知れない、よいマチ世界っていうモチーフ、使えるかもだよ、二人が創る映画に使おうぜ」

俊也「映画のモチーフ？ 紗香、映画作りの構想は、もう出来ているのか？」

紗香「映画創りの構想なんて、大して出来ている訳ないじゃん、俊ちゃんに出会った瞬間^{あいつ}に閃いたんだから。そういう事で此れか

ら車の中で、映画製作会議を開こうぜ」

俊也「映画製作会議、を？：それは好いが、

その前に、僕にはモウ一つ、幼い時に死ぬ

ような目に在った、話が在るんだが……」

紗香「えっ俊ちゃんには？まだ死ぬような目

に在った、面白い話が在るのか？」

俊也「面白い話では無い、また辛くて空しい

話だ、それでも聞いて欲しい？」

辛くて空しいという言葉の響きに紗香

の表情が変わる。

紗香「私は俊也さんと、苦楽を共にしたいの

です。聞かせて下さい」

荒波がゴロオと押し寄せる。

× × ×

俊也の声「僕は母の死後すぐに、海辺近くの

一軒家に住んでいた、祖母と叔父に引き取

られた……」 | 回想へ――

○ 荒れ狂う海岸・夕方（回想）

俊也の声「普段は優しい祖母だったが、母が

あんな死に方をした所為なのか、祖母の精神は時々、おかしく成った……」

× × ×

海が渦巻き怒った様に、波飛沫を上げている。

遠くに霞む夕陽が千切れている。

夕暮れ時の荒れ狂う海岸線で、幼い俊也は独りぼっちで、綺麗な小石を集めている。

祖母多恵（66）が、古ぼけた乳母車を引きながら、ゆつくりと歩いて来る。

× × ×

俊也「僕はもう小学生だよ、厭だよ、乳母車に乗るなんて」

多恵「俊也、言う事を聞きな。祖母ばあちゃんが乳母車押すからな、乗りな、俊也、楽しいぞ、嬉しい世界が待っているぞ……」

× × ×

荒れ狂う波際を、幼い俊也を乗せた乳母車を、多恵がヨロヨロと押して行く。

多恵は、ブツブツ言いながら乳母車を押している。

多恵の聲が、激しい波音に負けないぐらい響びく。

多恵「俊也のお父ちゃんは酷い人間だったぞ

！^{ろく}碌でもない奴だった。だから、優しい御前のお母ちゃんは、苦勞して死んだぞ。祖母^{ばあ}ちゃん^あの娘は死んだぞ……」

多恵は突然止まって、乳母車の向きを海に向ける。

多恵の顔が、荒れ狂う波の彼方を睨む^{にら}。

多恵「俊也は酷い^{ひど}奴の子だ、生きてちゃダメだ！ お前の父親は事業に失敗してよ、借金までして博打に手を出してよ、負けて逃げたぞ。録でも無い御前の父親がな、優しい澄江を死に追いやったんだ。俊也の父親は悪い奴だ！ だから御前も悪い子に生る^な。俊也、お前に生きて行く価値も、資格も無いぞ！」

巻き上がる海風の壁に、お前に生きて

行く価値は無いぞ！ の声が、木霊して
反射する。

――生きて行く価値は無いぞ！――

× × ×

多恵の潤^{うる}んだ目が、優しく微笑む。

多恵「俊也、祖母^{ばあ}ちゃんと一緒に、お母ちゃん
の処に行こうな」

俊也「ええっ？ 祖母^{ばあ}ちゃん！ 何を言っている
んだ？！」

不意に！ 唇を噛み締めた多恵が、乳母
車を力強く押し、多恵も波に身を投げ
る。

山のような大波が小さな乳母車を巻き
込み、力強い引き潮の中に流されて引
っ繰り返る。

俊也の目の前に広大な波が揺れ、口の
中に、鼻の中に、目の中に、ブクブク
と海水が入り込む。

叔父の声「おふくろ！ 俊也！ 何をしている
んだ！！」

海岸線に俊也の叔父（28）の、大きな叫び声が響く。

— 回想終了 —

○同・七里ヶ浜（現在）

灰色の海波。

静かに見詰めている二人。

紗香「その時、お祖母さんは、如何なつたんですか？」

俊也「死んだよ……」

紗香「……そうですか…… 俊也さんの、御母さんと御祖母さんは……心が……無く成ったんですね……」

俊也「心が無く成ったとは……？」

紗香「私と俊也さんは、失い掛けています」

俊也「何を言いたいんだ？」

紗香「私と俊也さんは、心を失いかけていて、俊也さんの御母さんと御祖母さんは、その心を失いました」

俊也「紗香、言っている事が良く解らないが、

その心とは何なんだ？」

紗香「生き続けたい！という、心です！」

× × ×

無数の黒い海波に、白く輝く波映がキラキラと輝いている。

○七里ガ浜の海岸

穏やかに、打ち寄せる潮波。

俊也が、浜辺に三脚を付けたビデオカメラを固定して、ファインダーを覗き込みアングルを決めている。

俊也「こんなもんで、良いか？」

宇宙人コスプレを着込んだ紗香が覗き込む。

ファインダーに前方の海波が映っている。

紗香「俊ちゃん、ここのシーンは、遙か彼方の惑星から星流しの刑で、地球に追放された星女^{せいじょ}サヤが、光るバリアと共に空から海に落ちて来るといいう、設定だからな」

俊也「凄い設定だな」

ウサギの耳の様なモノが頭に着いた、宇宙服のようなコスプレだが、紗香の胸の膨らみが強調されていて、俊也の観る眼が、驚く。

紗香「俊ちゃん、アタイが今から海の中に入って行って、膝上辺りの深さの所で手を振るから、其処でカメラのアングルをアタイの姿に合わせてよ。私が海に沈み込んだ辺りから、撮影を開始してよ、アタイが潜った海からバサッと立ち上がる所まで、撮影するんだよ」

俊也「解った、巧く映像が撮れたと想ったら大きな声でOK、失敗したと想ったら大きな声でNG、と言えば良いんだな」

紗香「そういう事だよ。何回も遣り直しはイヤだから、巧く撮ってよ。それから編集が大変に成るから、撮影は何時も、流し撮りじゃなくて、カット割りだぞ」

俊也「ああ、解った」

コスプレ姿の紗香が海に入って行く
とした時、若い男の声が掛かる。

細石「オジサンたち、ここで映画を撮っているの？」

若い痩せた男、細石（21）とガタイの大きな男、剛田（21）が、ニヤニヤした顔で立っている。

俊也「そうだが、素人映画だ」

剛田「素人映画って、ひよっとしてポルノ映画？」

俊也「いや、ポルノ映画では無い」

二人の男、にやけた顔で、紗香のバス
トを覗いている。

細石「お姉さん、凄い衣装だね、顔もいいし、
おっぱいも大きいよね、お金を出すからさ、
一緒にカラオケ行かない？」

俊也「何をバカな事を言っているんだ。申し
訳ないが、他の場所に行って貰えないか」

剛田「他の場所に行ってくれえ！？って、如
何いうことかな？ 此処は、オジサンの海じ

やないだろうが！」

俊也、劍幕に怯む。

剛田、狡猾な顔付で紗香に近寄る。

剛田「お姉さん、こんな素人映画の出演料なんて、安いでしょ、一時間で十万円出すから、俺たちに付き合ってくんないかな」

呆れ顔の紗香。

剛田が、紗香の体に触ろうとした時、俊也の手が、剛田の腕を掴む。

俊也「おまえら！警察を呼ぶぞ！」

剛田「触るなよ！おっさん！」

振り向く剛田、行き成り俊也の胸ぐらを掴み、俊也を殴り飛ばす。

口を手で押さえて倒れ込む俊也。

一瞬で紗香の顔色が変わる。

紗香「俊ちゃんに、なんて事をするんだ！ゲ

ス野郎が！」

素早く、傍に転がっている棒切れを拾い上げ、劍士の様に構える紗香。

剛田「ああっ、お姉さん、女劍士も遣るの力

ツコイイ！」

刹那！ 紗香の棒切れが振り下ろされ、

気合の声！

紗香「面！ 胴！」

剛田の驚愕の顔を！ 棒切れは掠め、瞬時に紗香の剣さばきは、デカ男剛田の脇腹を貫く。

うーっ！…という呻き声と共に浜辺に崩れ落ちて行く剛田。

迫力の殺陣裁きに、怖気づく細石。

声も出せない細石のわき腹を、紗香の持つ棒切れが鮮やかに貫く。

蹲る細石。

紗香「俊ちゃん、大丈夫か？」

俊也「ああ、大丈夫だ」

唇から血は出ているが、立ち上がる俊也。

○道路沿いの空き地（夜）

カーテンが閉められた俊也のワゴン車

が、停まっている。

後部席でジャージ姿の俊也と紗香が、肩を寄せ合い寝ている。

○藤沢市内の武道具店

店内に並んでいる、剣道の竹刀を見定めて
いる紗香。

俊也「2本も買う気なのか？」

紗香「そうです、俊也さんの分も買います」

俊也「僕には、剣道なんて遣る体力は、無

いぞ、それに、剣道3段の腕前だっという、

紗香の稽古相手をしたら、僕は即死だ」

紗香「何を言っているのですか、大丈夫です。

素振り練習だけの体力作りだと想って下さ

い」

俊也「今更、体力作りなのか……？」

殴られた顔を、大きなマスクで隠して

いる俊也、顔をしか顰める。

○鎌倉の報国寺

緑色の太い竹林の幹が、並んでいる。
竹林をバックに、まるで刀を持っている
るかのような演技で、舞い上がる竹笹
の中を、乱舞する紗香を、三脚に固定
されたカメラが、自動撮影で捉える。
紗香の周りに、竹の葉を巻き上げてい
る俊也。

○ホテルの部屋（夜）

Wベッドルームの壁際のテーブルの上
に、シナリオの基礎、シナリオ作法考、
シナリオ構造論、等の本が重なってい
る。

椅子を突き合わせ、俊也と紗香が話し
合いながら、シナリオを書いている。

紗香「俊ちゃんは、若い時に、シナリオライ
ターを目指していたのか？」

俊也「そうだ、だけど直ぐ挫折した」

紗香「紆余曲折しながら勉強しても、結局、逝
き着く処は、地獄だな」

俊也「何を訳の分からない事を言っているんだ。紗香、星女とトシが良いマチ世界に行ってから、如何成るんだ？」

紗香「宇宙美女と地球老人が、生きる価値を模索する設定だから、良いマチ世界は酒池肉林の世界だよ、それを踏まえて、俊ちゃんも考えてよ」

俊也「良いマチ世界は：酒池肉林の世界なのか……？」

× × ×

薄灯りの部屋内。

一つのベッドで抱き合うように寝ている二人。

壁際のテーブルの上に、書き終わったシナリオの紙が置かれている。

書かれたシナリオの一部が見える。

3・枯れた木

撓しなれて貧弱な枯れ枝。

見上げている老人トシ、手にロー

プを持っている。

トシ「ダメだ、こんな枝では死ねない……」
老人トシの哀れな顔。

4・無人の海辺

トシ、佇たたずんでいる。

果ての海原が霞んでぼやけている。
目の前の穏やかな海波に、巨大な光
の塊、落ちて来る。

バシャーーン！

驚くトシ。

目の前の海中から、宇宙服姿の若い
女が立ち上がる。

ずぶ濡れの宇宙オンナ、驚いてい
るトシに微笑む。

星女「私は遠い星から、この地球に、星

流しの刑で落とされました、星女せいじょです」

トシ「えっ？！ 貴方は？ 宇宙人……？」

星女「私は、地球の人間と言う生物一匹
に、生きがいを与えて来ないと、罪が

消えません。貴方、人間と言う生物で
すよね、貴方、生きがい無いですよね」
トシ「えっ？無いけど？」

星女「良かったー直ぐに生きがいの
無い年寄りの人間に遭^あえて、じゃ、
行きましよう」

トシ「行きましようって？何処へ？」

星女「好いマチ世界です！」

× × ×

○道路わきの雑木林

ワゴン車が道脇の雑草地に停められ、
ふたりが、雑木林の中で撮影中。

俊也が嬉しそうな顔で、一本の太い枝
を見詰めている。

紗香「カット！」

ビデオカメラを構えている紗香が、大
きな声を上げる。

紗香「俊ちゃん、ふざけて居るのか！この場

面は、主人公トシが、首つり自殺に対して、
悩んで怖気づいているシーンなんだよ。笑
っている場合か、やり直し！」

俊也は、もう一度、真剣な顔で上空の
木の枝を見詰める。

紗香「カット！ 俊ちゃんさ、真剣な顔で遣る
な、モット空しい顔をしろ！ 撮り直し！」
俊也「紗香、チョット、厳しすぎないか、僕
はプロの俳優じゃないんだから」

紗香「あのね、俊ちゃん、黒澤明監督はモツ
ト厳しかったんだよ。エキストラでも、怒
鳴ったんだよ！ はい、やり直し！」

○海岸道路下の砂浜

海岸道路の石垣は、2メートル以上の
高さが在る。

砂地で寝ころびながら、俊也がビデオ
カメラを構えている。

石垣の上から飛び降りようとしている、
宇宙人コスプレ姿の紗香が、下を見下

ろす。

紗香「此れって高すぎないか！」

下から、俊也の音が響く。

俊也「大丈夫だ。下には安物のマットが敷いて在るんだ、それに、飛び降りるのは紗香だからな、砂地に落ちても死にはしないよ。

さあ、紗香！ 飛び降りるんだ！」

紗香「わかったよ：え、え、えい」

紗香は、びくびくしながら、飛び降りる。

マットに落ちた紗香に、俊也が言う。

俊也「紗香、やり直しだ！」

紗香「何なんでだよ！」

俊也「このシーンは、星女せいじょが爽さわやかに空から落ちて来る場面だ。紗香の顔は、怖気づいたカッコ悪い顔をしていた。だから、やり直しだ」

紗香「解ったよ、もう一回やるよ」

一瞬不貞腐れた顔をするが、紗香は、石垣をよじ登って上に上がる。

紗香、今度は元気よく飛び降りる。

紗香「やあー！」

カメラを構えて撮影している俊也、首を傾げる。

マットに倒れている紗香に。

俊也「紗香、悪いけど、もう一回飛んでくれ」

紗香「俊ちゃん、もう一回って、如何言う事

だよ」

俊也「まだ、爽さわやかさが足りない気がした」

紗香「俊ちゃんさ、爽さわやかなアタイに何を言っているんだ！ 俊ちゃん注文が、酷ひどく無いか？」

俊也「そんな事はない、溝口健二監督は映画撮影中に、通りの電柱が邪魔だから、スタッフに退かしてくれと、注文を付けたんだ。

紗香、撮り直しだ！」

紗香「何の話をしているんだ…？」

○空き地（夜）

カーテンを閉めた俊也のワゴン車が、

止まっている。

○同・空き地（夜明け前）

静まり返った外は、未だ暗い。

ワゴン車内の後部席で、白色のジャー
ジ姿の俊也が、深く寝込んでいる。

× × ×

ワゴン車の外。

月明かりの下で紗香は、竹刀の四つに
縦割りされている一本、一本をナイフ
で削り、サンドペーパーで擦り込んで
滑らかにしている。

先ゴムを付けて先革や柄革つかに竹刀を入
れ、細い弦つるを使って複雑な結びを器用
に通し締め付けていく。

最後の仕上げに中結なかゆいを付けて紗香は、
片手で重さを確かめる様に軽く竹刀を
振る。

× × ×

紗香、眠っている俊也の体を、揺する。

紗香「俊ちゃん朝だ夜明けだ、練習だ！ 起きろ、起きなさい！」

俊也「……うー何んだ？ 如何したんだ？」

眠そうな顔で半身を起こす俊也。

俊也「紗香、まだ夜明け前じゃないか、起きるには早すぎだ。もう少し寝かしてくれ」

紗香「老人の俊ちゃんよ、あばら骨を折られる前に、猛稽古の開始だ！」

俊也「なんだ、猛稽古とは？」

○砂浜（夜明け）

人の気配の無い薄暗い海岸。

紗香と俊也が、竹刀の素振りを繰り返している。

紗香「俊ちゃん、振り下ろしをモット速く！ 打つ瞬間に力を入れる感覚だよ！ モット足を広げて！」

並んで竹刀を振る、黒いジャージ姿の紗香と俊也。

紗香「俊也さん、構えている時は、全身の力

を抜いてください。打ち込む瞬間に一点に力を集中して、打ち切るイメージが大事です」

× × ×

竹刀を構えて向かい合っている、俊也と紗香。

紗香の顔が不意に、厳しい表情に成ると、空間を劈つんざくような凄まじい声！

紗香「面めん！ 胴どう！」

紗香の竹刀の軌道が目にも止まらぬ速さで、俊也の頭に打ち込んで来ると思った瞬間、流れる様に胴に止め打ちされている。

○道路わきの食堂（夕方）

道路わきの食堂から、寄り添うように出て来る、俊也と紗香。

曇った空から二人に、雨が落ち始める。

○山林（夜）

薄暗い山林に、雨が槍の様に降り落ちて
ている。

雨がパシャパシャと叩き付ける雑草に
囲まれた土、カッパ姿の俊也がスコッ
プで穴を掘っている。

× × ×

びしょ濡れに成っている黒いバッグか
ら、ビニール袋に入った注射器、炙り
道具を取り出し、袋を逆さにして穴に
落とす俊也。

更に奥へと、スコップとバッグを手に
持つ俊也が、雑草を掻き分けて行く。

× × ×

強い雨風の中。

草木の間の俊也が掘った深い穴の中に、
ビニール袋の中の覚醒剤が振り落とさ
れる。

白い毒物は、雨粒と共に消えて行く。

× × ×

風雨に草木が靡なびいている。

ビショビショに濡れたカッパ姿の俊也
が、獣道を彷徨う。

× × ×

暗闇に揺れる黒い影から、声が響く。

紗香「俊ちゃん、何処？ 何処に居るんだよ！」

俊也「紗香、如何したんだ？ 如何して車の中
に居ないんだ！？」

紗香「車の中にひとりで居ると、危ないんだ

よ！」

俊也「何が危ないんだ？」

紗香の黒い影が、俊也の目の前に立ち
はだかる。

不意に、紗香の顔に、幻覚症状が現れ
る。

紗香「俊也！何処に捨てた！」

俊也「何を言っているんだ！？」

土砂降りの雨の空間に、紗香の幻覚症
状の音が響く。

紗香「白い粉、白い薬……何処、何処なの？
快樂を生む、白い薬……あー、あー、とて

も気持ち悪い世界……俊也が捨てたのか！

……退け！俊也！」

泥に塗まみれた紗香の体が、行き成り俊也

の体に打ぶつかって来る。よろける俊也。

紗香はうめき声を上げながら、雑草の、

根元に浮き出ている土砂の中に、しゃ

がみ込む。

紗香は土砂どしやを手でつかみ取り、見詰める。

紗香「うーうーっ、俊ちゃんの所せい為だよ、真

っ白だったアタイの薬が、真っ黒になっち

やったよ」

俊也「何を言っているんだ！紗香？」

紗香は狂ったように、土砂どしやすな砂を口の中に詰め込む。

俊也「紗香！？な、何を？やっているんだ！」

俊也は咄嗟に、紗香の顔を抱きかかえ

て、紗香の口に指を入れる。

紗香「ぐうえー、ぐうえー」

紗香が呻き声と共に、泥を吐き出す。

紗香「ううっー、ううー」

紗香は獣のような唸り声をあげ、俊也の手に噛み付いてくる。

俊也「うっ！」

俊也苦痛の声。

俊也の腕に、血が滴る。

紗香「ぐえっ、ゲえー、グエー」

紗香は、ゲロを吐く。

俊也の手から、汚物と血が混ざり、落ちていく。

× × ×

俊也が、雑草の中に、スコップとバツグを、投げ捨てる。

風雨激しい暗闇の道、虚ろな状態で黙ったままの紗香の肩を抱き、よろよると歩いて行く俊也。

身を俊也に預けて、虚脱状態の紗香。

真っ暗な空間に、豪雨が叩き付ける音が響く。

× × ×

降り落ちる雨の中、俊也がワゴン車の後部席のドア前に、びしょ濡れの紗香を立たせると、カップを脱ぎ捨て、車の中に入り込む。

× × ×

俊也が、衣類ケースから、タオルや下着類を取り出している。

ドアから、衣服を脱ぎ捨てた紗香が、雨粒滴る裸の姿で、入り込んで来る。

俊也 「紗香？ 大丈夫なのか！…？」

薄闇に浮かぶ、紗香の豊満な白い裸体。

見詰める俊也。

紗香 「…：ケダモノ！」

俊也 「ああっ…：ゴメン…：…」

思わず眼を逸らす俊也。

紗香 「タオル」

俊也 「…：ああ」

急いで、タオルを手渡す俊也。

微笑む紗香、俊也の腕を取る。

紗香「俊也さんは…優しい…」

紗香、俊也の血が滲んでいる腕に口を
付け、舐め始める。

俊也「紗香？ 何をするんだ！」

紗香の体が、俊也の体に寄り掛かって
来る。

紗香「私は、優しい俊也さんと、身も心も一
つに生りたい…汚^{けが}れの無い俊也さんに…
抱かれない…」

身を任せて来る紗香。

体を放す俊也。

俊也「何を言っているんだ…僕は、30歳以
上も歳が離れている、年寄りだぞ…」

紗香「私は、知らないケダモノたちに、押し
掛られ食られた、穢れ女…薬物を与えられ
調教された人間失格者…そんな私でも、
好きに成った人に抱かれて、汚^{けが}れた過去を
忘れたい、狂人の世界を消し去りたい…
お願いします！ 私を抱いて下さい！」

俊也「！…」

× × ×

薄暗いワゴン車の後部席。

俊也の体と紗香の体が重なり、ひとつ

に生^なっていく……

× × ×

車内ドア横に置かれた傘立てに、2本の竹刀が重なる様に刺さっている。

○空き地（早朝）

黒いジャージ姿の紗香と俊也が準備体操をしている。

竹刀を左右交互に何回も振る、素振り練習を繰り返し返し始める。

○高德院

俊也が鎌倉の大仏を、三脚に固定したビデオカメラで撮影している。

メイドコスプレの紗香が、大仏前の観客の間を、お辞儀をしながら歩き回る姿を、俊也が撮影する。

○江ノ電・極楽寺駅

ビデオカメラと三脚を下げた俊也と、
着物コスプレ姿の紗香が、改札口から
出て来る。

○極楽寺

手を繋ぎながら、山門に這入って行く
ふたり。

○海沿いの道路

海沿いの道路を、走るワゴン車。

○真鶴海岸（夕方）

夕陽に照らされている海波。
宇宙服コスプレ姿の紗香と黒いジャー
ジ姿の俊也が手を繋ぎ、夕陽浮かぶ海
波の地平線に向かって、ゆっくりと歩
いて行く。
そのシルエットを、三脚に固定された

ビデオカメラが自動撮影。

○空き地（夜）

ワゴン車の倒された後部席。

抱き合って寝ている二人。

紗香、俊也の手を振りほどき、静かに
起き上がる。

× × ×

紗香の小型バックを開ける手が、震え
ている。

紗香、底に入っている紙袋を開く。

中にビニールに小分けされた覚醒剤と
注射器が入っている。

見詰める紗香の苦悶の顔。

呼吸は荒いが、ジツと堪える紗香の顔。

紗香、平常の顔に戻り、静かに紙袋を
元に戻す。

○伊豆・城ヶ崎海岸

岩石に飛び散る波飛沫。

ビデオカメラを構えた俊也が、撮影していく。

傍らで、海波を見詰めている紗香。

○同・門脇つり橋

眼下に望む崖の様な岩々、荒れ狂う波が岩肌にブチ当たり、吹き上がっている。

紗香「ここは観光地で人の気配が多いから、

駄目だな……」

俊也「何が駄目なんだ？」

紗香「死に場所……だよ」

俊也「何をバカな事を言っているんだ」

紗香「俊ちゃんさ、アタイ、此処より静かで

見晴らしも最高で、車でも飛び込めそうな、

秘密の丘を知っているから……今から、

そこに行こうぜ！」

俊也「車でも飛び込めそうな！？秘密の丘？

ソんな所に行くのか？」

紗香「そうだよ、そこは、10年以上も前だ

けど、お父さんの車で森林の中を彷徨い走って、偶然見つけた、崖の上の空き地だよ」

俊也「崖の上の空き地：？なのか？」

紗香「そうだよ、希望の丘とも死望しぼうの丘とも言えるような、崖の上の空き地だよ」

俊也「希望の丘とも死亡しぼうの丘とも言える、崖の上の空き地？ とは？ 何を言っているんだ？ 一体ドンナ、所なんだ？」

紗香「行って見れば解かるよ」

城ヶ崎海岸の荒波が、渦巻いている。

○道なき道

鬱蒼うっそうと雑草が生い茂った獣道。

ワゴン車がギリギリ一台通れるか、通れないかの崖道。

ゆっくりと動いて行くワゴン車。

凸凹道を慎重に運転して行く俊也。

俊也「これは、道では、無いぞ」

紗香、平然とした顔。

紗香「道なき道だから、人も寄り付かない無

人の丘が在るんじゃないか。道のりは短いから、何回も来れば、直ぐ慣れるって」

俊也「えっ、紗香、ここに、此れから何回も来る心算なのか？」

紗香「そうだよ、観光地を巡るのも良いけど、時々此処に来て、映画鑑賞や読書をしなさいって、神さまのお告げが在ったんだよ」

俊也「そんなバカな：」

グラグラ揺れて走るワゴン車。

○絶景の丘

丘の入り口の坂。

大きな平らな岩が、入り口を塞ぐように地面から、顔を出している。

俊也のワゴン車のエンジンが、岩の段差を登り切れず唸っている。

× × ×

ワゴン車内で、必死にアクセルを踏んでいる俊也。

俊也「紗香のお父さんの車は、この岩を登れ

たのか？」

紗香「登れたよ、その時は、お父さんの車は、ラウンドクルーザーだったからな」

俊也「……」

諦める様にエンジンを止め、車を降りる二人。

× × ×

15メートル四方は在りそうな、丘が広がっている。

横に山の傾斜の岩肌が聳え、樹木の姿が点在し、下方の脇を2メートル位の幅の川が、流れている。

紗香「おっ、前より水量が増えている」

俊也「綺麗な川だな」

紗香「湧水が流れているんだよ、だから冷たくて美味しい水だし。この川は用足しにも便利だよ」

俊也「用足とは？ 紗香の家族は、此処で、

サバイバルキャンプでもしたのか？」

紗香「そうだよ、何時も3日ぐらいは、此処

で過ごしたよ」

俊也「如何いう家族なんだ？」

× × ×

川の水が、滝のように崖の岩肌に雪崩
落ち、水飛沫を上げている。

覗き込む俊也が、身震いをする。

眼下の荒波は、点々と突き出ている岩
肌を吹き上がり、渦巻いている。

飛び込めば、即死をイメージする、地

獄の絶景！

顔を上げた俊也は、目を瞠る。

太平洋の海原が壮大に広がり、青く輝
く波映が清々しく、地平線の果てまで
続いている。

突き進めば、幸福をイメージする、天
国の絶景！

紗香「俊ちゃん、今夜は、健康ランドに行っ
て体を綺麗にして、明日に、沼津に行っ
て食料やキャンプ道具を調達してから、また
来ようぜ」

○伊豆天城トンネル

山の中の古ぼけたトンネル、前にワゴン車が停まっている。

俊也が、ビデオカメラを三脚に固定している。

メイドコスプレ姿の紗香が、前に立つ。

紗香「川端康成も松本清張も此の天城トンネルを利用して、小説を書いたんだからな、アタイたちも利用しない手はないぞ」

俊也「それはいいが、このトンネルを抜けたら、よいマチ世界が広がっているのか？」

紗香「そうだよ、川端康成も書いているじゃないか、トンネルを抜けたら、そこは、よいマチ世界だった、って」

俊也「なんだ、それは？」

紗香「編集で、このトンネルが海底に在る様な、合成映像を作るから、さあ、撮影開始だよ」

× × ×

トンネルの前で、メイドコスプレの紗

香が案内する。

紗香へこちらが、よいマチ世界の入り口で
ございます。どうぞ、お入りください

俊也と紗香がトンネルの中に入って行
く姿を、ビデオカメラが自動撮影。

○伊豆スカイライン

走るワゴン車。

○健康ランド・沼津○○の湯（夜）

温泉に浸かっている紗香。

× × ×

大広間で、作務衣姿の俊也と紗香が食
事をしている。

○沼津・千本浜（早朝）

吹き荒れる浜風。

黒いジャージ姿の紗香と俊也が、竹刀
の素振り練習から、打ち込みの型練習
をしている。

俊也の動きが、格段に良くなっている。
凄いい気迫で、紗香に向かって、面の打ち込みから、切り返すように胴へ寸止めする。

× × ×

千本浜から観える美しい富士の姿。

竹刀を片手に、富士山を見詰めている

紗香と俊也。

紗香「富士山の麓に、自衛隊の基地が在って、私の家族は、4年間、御殿場の自衛隊官舎で過ごしました。私が通った高校は、この

沼津に在ります……」

俊也「えっ？紗香は、富士山の麓で暮らして、沼津で高校生活を送ったのか……」

素晴らしき眺望の富士山。

荒々しき波が打ち寄せる千本浜。

感慨深げに、見詰めている紗香。

○沼津港

俊也と紗香が鮮魚店で、次々と魚を買

い込み、アイスポックスに詰め込んでいる。

○ホームセンター

俊也が、大きなショッピングカートを押し、並んで紗香が歩いている。

カートに、キャンプ道具の他に大ハンマーが、積み込まれている。

○同・ホームセンター

買い物かごに、ダイヤモンドヤスリ、超小型サンダー、サバイバルナイフに杖の様な角材が積み込まれる。

○道なき道

鈍^{のろ}いワゴン車だが、崖道を、昨日よりスムーズに走って行く。

○絶景の丘

入り口を塞いでいる岩を、俊也が大ハ

ンマーを振り下ろし、打ち砕く。
紗香が、打ち砕かれた小岩を、草むら
に投げ込む。

× × ×

夕陽を浴びる絶景の丘、真ん中辺りに、
ワゴン車が止められている。
草木の無い地面に、浅い穴が掘られ、
周りを囲むブロックの上に、バーベキ
ュー用の網が置かれる。
薪に炎が上がり、俊也と紗香が、網に
肉や野菜や魚の具材を載せて行く。

○同・絶景の丘（夜）

遙か月の下、止められているワゴン車
のカーテンは開らかれていて、星空か
ら中が覗ける。

後部席で、ジャージ姿の俊也と紗香が、
寄り添い、パソコンの画面を覗いている。
映し出されている映画は、フェリーニ
監督の『道』。

空しい表情のジェルソミーナとサーカ
スで知り合った剽軽な男との、セリフ
の遣り取りのシーンで、紗香が突然、
パソコンを操作して、画面を停止させ
巻き戻し始める。

俊也「紗香、如何したんだ？ 如何して画面を
巻き戻すんだ？」

紗香「俊ちゃん、セリフだよ、このセリフが、
二人に取って大事カモなんだよ」

俊也「なんだ、その、大事かもとは？」
また、画面が流れ出す。

…
◇ …

女「私はダメな女だ。生きているのが嫌にな
った。この世で何をしたらいいの？」

男「おまえだって、何かの役に立つだろう。
この世の中に在るものは、何か役に立つも
のだ」

男、傍の小石を拾う。男、小石を見詰
める。

男「こんな小石でも、何かの役に立っている
……」

紗香、ここで映像を停める。

……◇……

紗香「俊ちゃん、此の映画は、巨匠フェリー

ニ監督の名作中の名作『道』だよ」

俊也「そんな事は解っているが、それが、ど
うかしたのか？」

紗香「この映画は、その辺に転がっている小
石でも、何かの役に立つと言っているんだ
よ、映画好きの俊ちゃんとアタイは、フェ
リーニ監督の名誉の為にも、それを立証し
なければ、ダメなんだよ」

俊也「何を訳の解らない事を言い出すんだ？」

紗香が昼間、買い物をした袋の中から、
ダイヤモンドヤスリ、金属のリング、
超小型サンダー等を取り出し、並べる。

紗香「俊ちゃんさ、これ等の物、何で買った
か解かるか？」

俊也「お金で買ったんじゃないのか？」

紗香「俊ちゃん！アタイが何時も言うセリフをパクるな！これ等の物は、そこいらに転がっている小石から、指輪を作る為に買ったんだよ」

俊也「小石を使って指輪を作るのか？……何でそんな物を作るんだ？」

紗香「買って来た道具を使って、だよ」

俊也「そういう事じゃなくて、何の為に、小石で指輪なんか作るんだ？」

紗香が声色を変える。

紗香「ふたりの将来の為にです」

俊也「ふたりの将来の為とは？」

紗香「結婚指輪を作りたいのです」

俊也「結婚指輪……まさか？僕と結婚を？……こんな年寄りの僕と……？紗香そんなバカな事を、本気で言っているのか？」

紗香、唇を噛み真剣な表情に成る。

紗香「私は！本気です！……私は、俊也さん

が承諾すれば、直ぐにでも警察に出頭して、更生の道を進み、真っ当な人間に生って戻って来たいのです。そして俊也さんと暮らしたいのです」

俊也「紗香……本気なのか……」

紗香「本気です！」

○絶景の丘とワゴン車内（夜）

星空の下。

絶景の丘からの展望。

崖下の暗い荒海が渦巻いている。

オーバーラップして、ワゴン車内。

ふたりの裸体が、激しく重なり合っている……

○絶景の丘（早朝）

黒いジャージ姿、紗香と俊也の竹刀が組み合っている。

○同・絶景の丘

ワゴン車の外に、ソーラーパネルが置かれ、横に新品のポータブル発電機が置かれている。

紗香と俊也、それぞれが小さなビニール袋を手に持ち、草地を掻き分け、綺麗な小石を探し回っている。

○ワゴン車の中

後部席に小型の折り畳み式テーブルが置かれ、上に、ふたりが選んだ1センチ以下の、10個の小石が並んでいる。テーブルに、丸ペンチ、角ペンチ、超小型サンダー、ダイヤモンドヤスリ、石座の材料になる空枠、太さの異なるミニワイヤーが入った小袋が数種類並んでいる。

紗香が、テーブルの小石の中から、緑色の石英ぽい石を手取る。

紗香「この石は翡翠ひすいだ！と想う心に勝る恋心かな」

俊也「何を訳の解らない事を言っているんだ。

その石は、ひよっとして翡翠なのか？」

紗香「そんな訳ないじゃん、本物の翡翠だと

想って、作った方が良いんだよ。結婚指輪

を作るんだからな」

俊也「そうだな……じゃ僕は、その赤っぽい

透明な石で作るとするか、本物のルビー石

だと想って、作るぞ」

紗香「そうだよ、その気持ちが大切だよ、俊

ちゃんは、貧乏で顔が悪くなくて年寄りだ

けど、そのツールキットを使えば、簡単

に本物紛いの指輪まがが作れるからな」

俊也「何て言い方をするんだ」

× × ×

二人は、ヤスリやサンダーを使い、真

剣な表情で、小石を削っている。

サウンドペーパーや砥石に水を振り掛け

研磨して行く。

× × ×

俊也「紗香、完成したぞ！」

紗香「えっ？もう出来たのか？」

俊也、出来上がった指輪を手に持ち、満足げに見詰める。

歪だが多角形に削られた面が、紅い輝きで光っている様に観える。

紗香「どう？見せてよ」

紗香、俊也の手から指輪を取り上げる。

紗香「おお！年寄りにしては、凄く好い出来栄えじゃないか」

俊也「年寄りには、余分だ。(得意げに)紗香は未だ出来ないのか？」

紗香「アタイは、俊ちゃんみたいに簡易ツールなんか使っていないからな、俊ちゃんの為に、デザインワイヤーを精密にねじ込んだ、プロ仕上げのカット面の、宝石を作っているんだよ。あと2時間以上は、係るよ」

俊也「あと2時間以上も係るのか？じゃ僕は、寝て待つことにするか」

紗香「寝て待つのか？それなら、邪魔だから、外で寝てよ！」

膨れている紗香の顔。

俊也「……」

○同・絶景の丘

崖の淵に座り込んだ俊也が、壮大に広がる青い海波の果てを、感慨深げに見詰めている。

紗香の声。

紗香「俊ちゃん、百万ドルの指輪が出来たぞ

！」

振り返る俊也。

俊也「出来たのか」

紗香「これだ」

紗香、俊也の目の前に指輪を翳す。

俊也「おお！なんだ！これは！本物の宝石をすり替えたのか！？」

綺麗にねじ込まれた台座、薄いガラス板が一枚一枚張り付けられたような、複雑なカット面が、ダイヤモンドの様に光り輝いている。

紗香「情熱の問題だよ、俊ちゃんより、百倍以上の気持ちを込めて作ったんだからな」

俊也「これを、僕に呉れるのか？」

紗香「当たり前じゃないか、体の関係が成立しているんだからな。俊ちゃんが作った高級そうな指輪を、アタイにも頂戴よ」

俊也「僕が作った素人指輪で好いのか？」

紗香「当たり前じゃないか、男と女の、心と体の契約成立は、指輪の交換、だからな」

× × ×

崖の上の丘に立つふたり。

俊也が、紗香の指に指輪を嵌める。

紗香が、俊也の指に指輪を嵌める。

紗香「俊也さん、私を抱いて下さい」

俊也「ああ」

× × ×

絶景が見渡せる、崖の淵。

俊也と紗香が強く抱き合っている。

○ワゴン車内（夜）

ポータブル発電機が駆動していて、ノートパソコンの電源が射しこまれている。

俊也と紗香が肩を寄せ合い、ノートパソコンの画面を覗いている。

流れている映画は、トムハンクス主演のギャング映画の傑作『ロード・トゥ・バーデイション』

夜の街中での、ギャングたちの壮絶な銃撃戦のシーンを、目を瞠って観ている紗香の顔。

○同・ワゴン車内（夜中）

俊也の腕に抱かれて寝ている紗香が、

— うっ—、うっ— とうな魔まされている様な声を漏らし、ハッと目を覚ます。そっと小型バックを持ち、外に出る紗香。

○同・丘の崖ブチ（夜中）

暗い夜の海波が荒れている。

崖淵がけふちに立つ紗香が、放心したような顔で、小型バツクの中を見詰めている。

紗香の息が荒い。

紗香がバツグの中から、小さなビニール袋に小分けされた、覚醒剤の粉を取り出す。

小瓶に這入った液体の中に、覚醒剤の粉を入れ振る。

紗香、バツグから注射器を取り出し、注射器で液体を吸い込み、腕に当てる。更に紗香の呼吸が荒くなり、針を腕に差し込もうとした瞬間、紗香は、ハツとした顔で我に返り、振り払うように、注射器を小岩に叩き付け、崖下に投げ捨てる。

× × ×

紗香が空しい顔で、覚醒剤の小袋を破り、海風の中に振り撒いている。

全てを捨て切ると、紗香は項垂れるよ

うに膝まづく。

崖から見渡す、黒い海波が穏やかに生
っている。

駆けつける、俊也の声。

俊也「紗香、如何したんだ！？ 大丈夫か？」

紗香「ごめんなさい、もう大丈夫です」

俊也「如何したんだ？」

紗香「思い出したくない、厭な夢を観て仕舞
って……でも、もう、大丈夫です」

俊也「思い出したくない、厭な夢とは……」

○同・ワゴン車内（夜中）

俊也と紗香が肩を寄せ合い座って居る。

紗香「3年前、私が看護師をしていた時です。

勤務先の病院近くの通りを歩いていたら、
剣崎が芸能プロダクションの代表で、新人
女優のスカウトの為、病院周りをしている
と言つて来ました」

俊也は、幕張の駐車場を訪ねて来た、
鋭い目つきのイケメン男性を想い浮か

べる。

俊也「映画館で、紗香を追い駆け廻していた色男が剣崎なのか？」

紗香「そうです。その時私は、看護師をしながら演劇学校に通って、女優を目指していたのです。だから、その名刺を観た時に、天にも昇る気持ちに成りました……」

紗香は大きな息を吐くと、一気に話し出す。

紗香「数日後に、ヒロイン役のオーディションが在るからと連絡が在り、剣崎の芸能プロダクションに、私が喜び勇んで訪ねた時から、地獄が始まりました。芸能プロダクションは表向きで、実際は麻薬の密売組織でした。組織は、東京では無く、千葉県のひとけ人気のない森林に囲まれたビルに、在ったのです」

俊也「東京では無くひとけ人気の無い、千葉県の海沿いとは？」

紗香「千葉県の人里離れた海岸線沿いは、麻

菓の密売の取引に都合が良いのです。剣崎は、モーターボートを所有していました。私は最初に、その建物の住所を知った時、実家と近くなのに、驚きました」

俊也「紗香の実家は千葉県なのか？」

紗香「そうです。九十九里浜の近くに、私の実家が在ります」

紗香は、スマホを取り出し、俊也に家の外観が映った写真を見せる。

広々とした庭園から、二階建ての和風式の豪邸が映っている。

俊也「凄い屋敷邸じゃないか、紗香のお父さんは、どんな仕事をしているんだ？」

紗香「父は、今は化粧品会社の専務をしています。ですが、以前は、自衛隊の上級士官でした。剣道は、幼いころに父から習いました」

俊也「コスプレ紗香から、想像も付かない家庭環境じゃ無いか、実家に戻って事情を話せば、適切な処理をしてくれる気がするが」

紗香「そうだと想います。父と母は優しいか」

ら、実家に帰って今の現状を話せば、怒る以前に、直ぐに警察に出頭しなさいと言う筈です。そして父は、直ぐに会社を辞めると想います。情けない娘は実家に迷惑と災難を振りまく、犯罪者に成り果てて仕舞ったのです……私は、到底実家に帰る事など、出来ないと思っています……」

紗香、情けない顔に生ってスマホの電源を落とす。

紗香「私は、行き成り強姦されたのです……」
俊也「行き成り強姦!？」

紗香「剣崎のいる部屋に這入った途端でした、待ち構えて居た手下の黒川と立石に、羽交い絞めにされて、麻酔薬の様な物を嗅がされたのです」

俊也「それはもう、犯罪じゃ無いか」

紗香「アイツらに犯罪の意識は在りません。

剣崎は、人殺しも辞さない、冷血で狂鬼の狂人です。配下の人間たちは怯えて、どんな悪行も、剣崎の言いなりでした」

俊也「劍崎は、そんなに冷酷な人間だったのか……」

紗香「私は、気が付いた時には、ソファの上に裸にされていて、黒川が私の体の上に押し掛かっています。フラッシュがボンボン照射されて、恥ずかしい写真が撮りまくられたのです。写真を、実家にばら撒くぞと脅されて、私は劍崎の言いなりに成ったのです……」

俊也「……！」

紗香「私は、病院も演劇学校も辞めてから、ビルの個室で黒川と立石に、暴力と強姦の中で調教を受けたのです。麻薬付けで廃人と生りながら、密輸覚醒剤の受け取り人も遣りました。特別会員と呼ばれている人間たちに、注射を打つ役目を担いながら、体を提供して快楽に溺れた事も在ります。私の人生は、あいつ等にズタズタにされ、地獄に落とされたのです！……」

俊也「紗香の人生を滅茶苦茶にしたアイツラ

は、人間の屑だな……許せない！」

紗香の空しい顔。

紗香「黒川と立石は、大した運動能力を持っていませんが、剣崎は、運動神経も腕力も長けています。月に何回かジムに通い体を鍛えています。毎日行う、木刀の素振りも鋭いです……それでも私は、今度、剣崎に出会ったら……躊躇なく（唇を噛み締める）……叩きのめします！」

○同・絶景の丘（夜明け前）

星明りの薄暗い空間で、ジャージ姿の紗香が、パイプ椅子に座り、サバイバルナイフを器用に使い、野球バット位の長さの角材を、削っている。

紗香の横のブルーシートの上には、木の形を成した見事な作品が、既に一本、置かれている。

○同・絶景の丘（朝）

黒いジャージ姿の俊也に、紗香が木刀を渡す。

俊也「えっ？竹刀ではなく木刀で稽古をするのか？危ないじゃないか？」

紗香「重い木刀の練習で、肩や腕の動きを鍛えます。それに此処は、大きなイノシシやヘビが時々出没します。身の安全を守る為には、木刀の方が良いのです……」

俊也「身の安全を守る為？…なのか？…しかし、重いぞ……」

× × ×

木刀で、打ち合いの稽古をしている紗香と俊也。

真剣な表情で躲す、太刀の音がバン・バン・バンと響く。

可成り危なく、激しい稽古をしていく、ふたり。

○同・絶景の丘

紗香と俊也が、丘の隅の土地を鋏やス

コップで、掘り起こしている。

俊也が培養土と書かれた肥料の袋を開け、掘り起こした土に振り撒き、紗香が鍬で耕して行く。

× × ×

耕された区画に、貼りつけた板にへ練習畑」と書かれた杭が立っている。

○同・ワゴン車内

車内のミニテーブルの上に、パンとカップヌードルが置かれ、俊也と紗香が囲むように昼食を摂っている。

紗香「ところで俊ちゃん、今、持ち金は幾ら在るんだ？」

俊也「新品の発電機が10万円以上だったからな、それにホテル代や食費、ガソリン代や雑費で……残り67万円位だ」

紗香「67万円か……苦しいな、早いところ、田舎の、畑にしても良い、土地付の貸家を、見つけようぜ」

俊也「そうだが、そう簡単に、土地付きの、家賃の安い一軒家なんて、見つかるか」

紗香「それを頑張つて、早いところ見つけるんだよ。ポツンと一軒家の契約が決まったら、アタイは直ぐに警察に出頭するからな、俊ちゃんは、アタイが出所するまで、畑仕事をしながら、飢えを凌ぐんだよ」

俊也「そうだな、紗香と一緒に暮らせると想像ば、飢えぐらい如何ってことないが、早いところ一軒家の貸家を見つけた方が良さそうだな」

紗香「そうだよ、早いところ、乙女と老人が暮らす家を見つけて、警察に行かないと、アタイの刑が時効に成っちゃうじゃないか、という事で、今から、ふたりの幸せを願つて、俊ちゃんの大好きな、クラウディア・カルディナーレ主演の『ブルーベの恋人』を観ようぜ」

俊也「今から観るのか？」

紗香「そうだよ……年寄りで幸せの薄い俊ち

やんでも、この映画を7回も観れば、大切な事が解かるはずだからな」

俊也「何だ？その大切な事とは？」

紗香「大切な事は、ふたりに取っての、よいマチ世界の意味だよ」

俊也「二人に取っての、よいマチ世界の意味？が、大切？……何を言っているんだ？」

× × ×

ワゴン車のカーテンが閉められている。パソコンの画面は、映画「ブーベの恋人」のラストに近いシーンが流れている。

映画のエンドマークが出て、観ていた二人は暫くの間、余韻が残っている表情をしている。

余韻を破るかのように、紗香が言葉を発する。

紗香「俊ちゃん、解っただろう、二人に取っての、よいマチ世界の意味が？」

俊也「いや、解らないな、母さんの言った、

よいマチ世界は、あの世の事だぞ」

紗香「違うよ、二人に取っての、よいマチ世界は、死の世界じゃ無いよ」

俊也「如何いう事だ？」

紗香、ニヤリと微笑む。

紗香「映画の中で、マーラの恋人、ブーベは、如何なっただ？」

俊也「刑務所に入れられたが？」

紗香「それで恋人のマーラは、如何いう行動を取っただ？」

俊也「刑務所のブーベに面会に行ったり、あとはブーベの出所を待つことか……」

紗香「それだよ、俊ちゃん」

俊也「それだよ、とは？」

紗香「俊ちゃんの恋人、妻でも良いが、紗香は、これから如何なるんだ？」

俊也「刑務所に入る」

紗香「夫の俊也は如何するんだ？」

俊也「……出所を待つ……」

紗香「何故だ！何故、俊ちゃんは、犯罪者の

紗香を待つんだ！」

俊也「何故かとは？……恋人、いや妻だから、
かな……？」

紗香「俊ちゃん、それだけか」

俊也「如何いう意味だ？」

紗香「俊也は紗香が好きだから、待つんだよ！

紗香は俊也が好きだから、早く刑務所から
出たいんだよ！」

俊也「……」

紗香「俊ちゃん、よいマチ世界を、漢字で書
くと、こう生なるぞ！」

紗香、紙を取り出し、マジックで大き
な文字を書く。

—— 好よい待ち！ 世界！ ——

俊也「！」

○同・ワゴン車内

俊也がビデオカメラの手入れをしてい
る。

紗香が大きなバッグの中に、メイドコスプレ、着物コスプレ、宇宙服コスプレを入れ込み、その上に木刀を1本入れる。

紗香「俊ちゃん、今夜は下界で二人宴会だ、そろそろ、出かけようぜ」

俊也「紗香は、酒が飲めないのに、大丈夫なのか？」

紗香「好い映画を創る為なら、飲めない酒も飲むよ、アタイは演技派女優だからな」

俊也「……」

○雑林の道

ワゴン車が、崖の急勾配を下くだって行く。

○豪華ホテルの一室（夜）

スイートルーム。

洋式の大きなベッドが二つ並んでいる、部屋脇に、個室に成った和室が在る。大きなお膳に豪華な料理が並んでいる。

満足そうに座り込んでいる紗香が、顔を上げ、妙な顔をする。

壁に一枚の、油絵が飾られている。

紗香「何でホテルの部屋に、油絵何て飾って在るんだ？絵を飾るんなら、普通はロビーじゃないのか」

黒い空間が覆う中に、灰色の海が不気味に波打っている絵。

俊也「そうだな、ホテルの部屋に、絵が飾られていたとは珍しいな」

紗香「しかも、暗い海の絵じゃん、地獄の海みたいで、嫌な感じだよ」

俊也「何を気にしているんだ、さあ、紗香、酒池肉林の世界の撮影を開始するぞ」

紗香「お年寄りが、張り切っているじゃん、だけど俊ちゃん、撮影に入る前に、お酒で乾杯だよ。高額なスイートルームを頼んだのは、撮影の為にアタイたちの婚約を、記念してだからな」

俊也「そうだな、だけど紗香、酒は、大丈夫

なのか？無理をする必要はないぞ」

紗香「大丈夫です。好い映画創りの為に私たちの将来の為に、お酒を飲みます……」

× × ×

三脚に固定されたカメラが撮影して行く。

メイドコスプレ姿の紗香が、パジャマ姿の俊也を案内している。

紗香「トシ様、こちらが、よいマチ世界の、酒池の間で御座います、星女様せいじょがお待ち兼ねです、さあ、お入りください」

俊也「おおっ、此処が！生き甲斐を生むと言う酒池の間なのか」

紗香「此処を堪能されましたら、次は、大きなベッドが用意されている肉林の間に、ご案内致します。地球の男性に、更なる生き甲斐を与える、空間で御座います」

× × ×

俊也がビデオカメラを手に持ち、構える。

御膳の前に座る、宇宙コスプレ服姿の紗香が、迎えるようにニッコリ微笑む。

× × ×

三脚のカメラが自動撮影を始める。

宇宙コスプレ姿の紗香と浴衣姿の俊也。

二人が並んで座って居る。

紗香「さあ、食べましょう、さあ、飲みまし

よう」

大きな御膳に大きな舟守、上に刺身類が、鯛の姿盛、伊勢海老の姿盛が並んでいる。

皿に牛肉ステーキが、フルーツの盛り合わせが載っている。

× × ×

演技なのか、下品にガツガツと食べまくる紗香と俊也。

食べる食べる俊也と紗香。

カメラが撮影していく。

× × ×

紗香が俊也に酒を注ぐ。

俊也が紗香に酒を注ぐ。

下品に、がぶがぶ飲む飲むふたり。

カメラは回っている。

× × ×

喜びの顔で手を取り抱き合い、踊り捲くる紗香と俊也。

次第に、ふたりの顔が、苦痛の表情に変わって行く。

踊る踊るふたりの姿が、フレイムから出たり入ったり。

フラフラで、乱れた足取り、狂った動き、苦しそうに、畳に倒れ込む二人。

自動撮影が止まる。

× × ×

着物コスプレ姿に着替えた紗香が、ふらふらしながら、木刀を振りかざす。

紗香「私は地球女剣士だ、私の伯父を誑たがかし
ているという宇宙オンナは、おまえか！」

俊也が、よたよたししながら、三脚に固定されたカメラを操作し、紗香を撮影

している。

紗香「凝こんなハーレムのような所に、生き甲斐がなど無い！ 酒池肉林など本当の生き甲斐では無い！ 地球老人を惑わす宇宙オナよ！ 成敗せいばいしてくれろ！」

紗香、木刀を振り下ろし、ふら付きながら狂乱の立ち回りをする。

紗香、ビデオカメラで撮影している俊也を見て動きを止め、おやっ？という声をだす。

紗香の眼つきが変わる。

紗香「あれ？ 剣崎さんでは在りませんか？ ……
……コナナ所で何をしているのですか？ ……
……また：イヤらしいビデオの撮影ですか？ ……
……また、オナナを地獄おとしに陥おとしれるのですか！ ……
……下衆げす野郎が！ ……！」

酔よっているながら驚く俊也。

俊也「さ、紗香、な、何を言っている、僕は…
……剣崎じゃ無いぞ。そんな、せ、セリフ…
……シナリオに書いて無いぞ…！？」

紗香、狂鬼の眼つき。

紗香「劍崎よ！地獄に落ちろ！」

紗香が木刀を振り下ろす。

木刀が三脚のビデオカメラに、バキツと当たる。

打っ飛ぶカメラ、壊れて畳に転がる。

俊也も転がり、酔いが打っ飛ぶ。

俊也「紗香、何をするんだ！？」

紗香、よろけ乍ら、壁に飾られている油絵を観る。

紗香「何だ？この絵は？バカげた金で、こ

んな絵を買ったのか？！…趣味が悪いな…

…悪党、劍崎！…死ね！」

紗香、木刀を思いつ切り振り下ろす。

バサツと切り裂かれる油絵。

俊也「何をしている！？紗香！」

俊也、咄嗟に紗香を抱き抑える。

ドサツと畳に倒れ込む、ふたり。

× × ×

正気に戻る紗香。

紗香「…これは！？…」

額縁ごと破壊され、畳に崩れ落ちている油絵。

俊也「紗香、酔たのか？ 幻覚か…？」

紗香「わからない、私は何を…：…本当に、本当に、ごめんなさい！…」

項垂れる紗香。

俊也「遣ってしまった事はしようがないが、この絵は、一体、幾らする物だろうか？」

紗香「！」

○同ホテル・フロント

俊也と紗香が、ホテルのフロントの椅子に、無言で座っている。

時計は、午前十時を過ぎている。

ホテルの支配人、杉下（48）が来る。

杉下「新田さん、お待たせしました」

立ち上がる俊也と紗香。

俊也「今回は、大変なご迷惑をお掛けして、申し訳有りませんでした」

ふたり、深く頭を下げる。

杉下「いや、過ちは誰にでもありますから、当ホテルとしては、絵の代金と宿泊料金さえ都合して頂ければ、穩便に済ませる心算ですのぞ」

紗香「（神妙な顔）……で……絵は、幾らなのでしょうか？」

杉下「あの絵は、昨年、オンラインで購入した絵でして、その時の購入額が……」

○伊豆の海岸線道路。

走っているワゴン車。

後部席に、破壊されたビデオカメラが転がっている。

力ない顔で運転している俊也。

助手席の紗香は項垂れて、悲壮な顔をしている。

俊也「持っている御金で、足りて良かったよ……」

紗香、顔を上げる。

紗香「何を言っているんですか……私の所為で、残りの御金は……2万円しか……無いんですよ。（悲痛な顔で）もう、ふたりが生きて行く御金は無いですよ……全て……私の所為で……」

俊也「過ぎてしまった事だ……今夜は、最後の夜で……最後の映画だな……」

紗香、異様な微笑みを浮かべる。

紗香「……俊也さん、2万円は在るんですよ」

俊也「2万円位は在るが？」

紗香「俊也さん、スタンドに依って、車のガソリンを満タンにして下さい」

俊也「……如何いう事だ？二人の秘密の丘に着けば良い事だ。もう車に、ガソリンは必要無いぞ？」

紗香「（失意の声）あの世の、よいマチ世界は、可成りの道のりだと想います。如何か、車にガソリンを入れて遣って下さい……」

俊也「……？」

車窓に、黒い海が靡なびいている。

○絶景の丘（夜）

星ひとつ無い暗い夜に生っている。

ワゴン車がポツンと、絶景の丘に止ま
っている。

× × ×

カーテンは閉められている。

ワゴン車内。

肩を寄せ合い、空しい顔で、パソコン
の画面を見詰めている二人。

流れている映画は、佐久間良子主演の

『五番町夕霧楼』

映画が半ばに差し掛かった時、今まで
悲壮な顔で無言だった紗香が、ポツン
と言い始める。

紗香 「夕子（佐久間良子）さん、昔の恋人に
再会したから、心も行動もガラリと変わっ
たんですね……」

俊也 「そうだな……」

紗香 「人生って……出会いと別れの色波で……
ドラマが生まれる気がする……」

俊也「そうかも知れないな……」

紗香「幼い俊也さんが、あの時、バツタに出会っていなかったら……俊也さんの御母さんが列車に飛び込んでいなかったら、俊也さんの人生は、大きく変わっていた筈はずです……私が道端みちばたで、剣崎に出会っていなかったら……私が駐車場で、俊也さんを見かけなかったら……私は、違った方向に違った道に、向かっていた筈です……」

俊也「そう言われると、不思議だな、人生は、色んな道が入り組んでいるのかも知れないな……」

ふたり、また黙って映画を観続ける。

画面は美しい海でエンドマーク。

× × ×

俊也「紗香、心の準備は出来たか？」

紗香「ダメみたいです」

俊也「ダメとは……？」

車のフロントパネルの上、透明ケースの中に、二つの指輪が並んでいる。

見詰める紗香。

紗香「俊也さん、ふたりは、生きる希望を見
い出しましたよね」

俊也「ふたりが一緒に暮らす事か？」

紗香、窓外の真つ暗な空間を覗いている。

紗香「……俊也さんの御母さんは、お金が無
くてもプライドが在りました、だから死の道
を選びました」

俊也「そうだと想うが、何が言いたいんだ？」

紗香「薬物女の私には、プライドなんて在り
ません。だから、生への道を選びたいので
す。俊也さん、私の実家に行つて貰えませ
んか」

俊也「紗香の実家へ？」

紗香「お金の無心に行きます！ 行けば私は、
警察に出頭する事に成りますが、事情を全
て話せば、父と母は間違ひなく俊也さんに、
2百万円とか3百万円とかの御金を都合し
てくれます。出来れば、その御金で田舎の
一軒家を借りて、私の出所を待つて居て欲

しい……」

俊也「紗香が望むなら、それは良いが、そんな事が実際に出来るのか？」

紗香「出来ます！ 私には、もう、プライドなんて無いのですから！」

俊也「……」

○夜中の道路

走るワゴン車。

○住宅街の道路

並ぶ屋敷に、日差しが当たっている。

住宅街の道路を走るワゴン車。

運転している俊也。

俊也「もう、紗香の実家は近いのか？」

紗香「もう、直ぐそこです」

感慨深げに住宅街を眺めている紗香。

紗香「えっ!？」

驚きの声を上げる。

道横に剣崎の外車が止まっている。

運転席に黒川、助手席に立石、後部席に劍崎の姿が。

紗香と劍崎の眼が合う。

劍崎の眼光が、キラリと光る。

勢いよく走り出す、劍崎の外車。

俊也「紗香、如何したんだ？」

紗香「このまま、この道路を真っすぐに走って、突き抜けて！」

俊也「何かあったのか？」

紗香「俊也さん、バックミラーで後ろを」

俊也、バックミラーを観る。

大きな車の影。

紗香「劍崎の車です」

俊也「ええっ！？ 劍崎の車なのか！」

紗香「あいつらは狂鬼です。気持ちを強く持って下さいね！」

俊也「！：」

○林道

脇に生い茂った雑草、林道を走るワゴ

ン車。

ワゴン車が来て空き地に止まる。

木刀を片手にした紗香と俊也が、素早く降り、空き地に立つ。

直ぐに、劍崎の車が来て止まる。

○同・空き地

木刀を構えて立っている紗香と俊也。

車を降りる、劍崎、黒川、立石。

劍崎と立石が木刀を手に持ち、黒川は拳銃を手にして歩いて来る。

紗香、木刀を鋭く振る。

紗香「ああっ！危険ですから、それ以上、近づかないで！」

苦笑いを浮かべて、立ち止まる3人。

劍崎「紗香、元気そうだな。クスリを返して貰おうか、今直ぐ寄越せば、逃げた事は許して遣る」

紗香「あー、あの毒物は危ないので、全部捨てたよ」

劍崎「紗香！正気で言っているのか！？：ま
あ、葉は如何でもいい：：そちらのオヤジ
さんと一緒に、死体に成って貰えば！」

劍崎、狂鬼の形相を俊也に向ける。

俊也、遊びではない本当の殺し合いを
感じる。

俊也の手が震え顔が怯えおびだす。

紗香が木刀を持つ手をだらりと下げ項
垂れ、隙だらけのポーズをとる。

立石が思わず、木刀を振り回し突進し
てくる。

立石「ウワァー！」

紗香の気合の声が響く！

紗香「面！胴！」

面と見せかけた紗香の木刀が、立石の
脇腹を貫く。

立石「うえー！」

立石、うめき声と共に崩れ落ちて行く。
更に紗香の怒りの木刀が、立石の背中
を叩き付けた瞬間、黒川の拳銃の発砲

音が響く、怯む紗香。

刹那！ ビュツという音と共に、劍崎の木刀が、紗香の脇腹にバシツと喰い込む。

紗香「うっつ！」

呻き声と共に倒れ込む紗香。

俊也「紗香！」

驚愕の俊也の顔。

劍崎の木刀が紗香の背中を叩き付ける。蹲る紗香に、黒川が拳銃を向け、撃ち殺そうとした時。

俊也「ウォー！」

脱兎の俊也の木刀が、黒川の拳銃を叩き飛ばさず。

俊也「面！ 胴！」

俊也の渾身の木刀が、黒川の脇腹を打ち抜く。

声も出ずに崩れ落ちて行く黒川。

劍崎を警戒する様に、素早く駆けて、対峙する俊也。

劍崎、木刀を抱え、パチ、パチ、パチと、ゆっくり手を叩き、余裕の笑みを浮かべる。

劍崎「年寄りにしては見事だった！ 雑魚相手だったがな……おや？ ……何処かで観た顔だな？ ……駐車場での、オヤジでは無いか……？」

俊也「覚えていて貰って、光栄だ」

劍崎「いい歳濃こいて、紗香を手籠てごめにするんじゃないか！」

俊也「お前らのような、ケダモノとは違う！」

劍崎の顔色が変わる、鋭い目つきで、木刀を構える。

痛みを堪えて、よろよると立ち上がる

紗香、絞り出すような声。

紗香「と、俊ちゃん、に、逃げろ！」

紗香の声で、全身に凄まじい氣迫が漲る俊也。

俊也「僕は、逃げない！」

俊敏な動きで駆けこんで来る劍崎が木刀を振り上げ翳かざした時、凄まじい紗香

の叫び声。

紗香「下衆野郎！ 劍崎、死ね！！」

一瞬、怯む劍崎。

俊也の気合の声が響く！

俊也「面！ 胴！！」

俊也の木刀が劍崎の顔に当たると同時に、凄まじい剣さばきが、劍崎の脇腹を貫く。

劍崎「うっ！…う、うあつ！」

劍崎の顔から血が噴き出し、崩れ落ちて行く。

× × ×

俊也「紗香！ 大丈夫か？」

紗香に駆け寄る俊也。

紗香「俊ちゃん、黒川のポケットだ。車の鍵だ。車の鍵を取り出すんだ！ 劍崎の車には金が在る！」

痛みを堪えている紗香。

○道路

走っているワゴン車内。

運転している俊也。

俊也「紗香、病院に行かなくて本当に大丈夫なのか？」

後部席に座り込んだ紗香が、痛みに堪え乍ら、中型バツクの中を覗いている。

紗香「大丈夫だよ。傷は重傷じゃ無い中傷だから、ぜんぜん平気だよ」

俊也「なんだ、その、中傷とは？」

紗香「おおっ、俊ちゃん、1万円札が2000枚以上は、入っているよ」

俊也「200万円ものお金が、入っているのか」

紗香「これで、直ぐに山の中の一軒家を探して、アタイは刑務所に這入って、その間は俊ちゃん、畑仕事を頑張ってよ」

俊也「そうだな……」

紗香が、更に、1万円札の底を覗くと大きな薬袋が入っている。

薬袋の中には、固形の薬と液体が入っ

ている透明な小瓶と茶色の小瓶が幾つか見える。ひとつに麻酔薬と書かれたラベルが見える。

紗香「あつ、強力な、痛み止めの薬が入っている！」

俊也「強力な痛み止めの薬……？」

額に汗が滲んでいる紗香の顔色が、更に変わる。

紗香の目先に、ビニール袋に小分けされた白い粉とビニールに包まれた注射器が……

○コンビニ・駐車場

俊也のワゴン車が停まっている。

後部席のドアがガラツと開き、レジ袋を抱えた俊也が。

俊也「紗香、大丈夫か、ペットボトルの水と夜の食料を買って来たぞ」

紗香「(力無く)……俊ちゃん……ありがとう……」

額に汗が、痛みを堪えている紗香。

俊也「紗香、本当に大丈夫なのか？」

紗香「…もう…大丈夫です…薬を飲めば…」

俊也「そうか…？」

○東名高速道路

俊也のワゴン車が飛ばしている。

俊也「紗香、薬は、効いているのか？」

後部席をチラッと覗く俊也。

紗香が深い眠りに就いている。

俊也「（呟く）薬が効いた、みたいだな…」

○絶景の丘（夜）

ワゴン車が止まっている。

後部席で小テーブルの上の、パンやカ

ップヌードルで、夜の食事を摂ってい

る俊也。

俊也の眼先に、中型の黒いバックが在り、横で紗香が眠っている。

俊也「（呟く）長い眠りだな…？」

俊也、首を傾げる。

○同・ワゴン車の外（夜）

崖っぷちに立ち、夜の絶景を眺めている俊也。

眼下に、深い海が荒れている。

黒い波が吹き荒れ、岩肌に渦撒いている。

月明かりの下、果てしなく続く海波が、靡いている。

紗香が駆けて来る。

紗香「うわぁー、元気に成ったぞ！ 俊ちゃん！ アタイは、元気に生ったぞー」

振り返る俊也。

紗香が立っている。

着物コスプレに帯を巻き、その中にサバイバルナイフが射しこまれている異様な姿。

俊也「なんだ？ その恰好は？」

紗香「アタイは、演技派女優だ、今から芝居を遣るぞ！ うおふおふお、うおふおふお」

俊也「紗香！ また幻覚症状か！」

紗香、スタスタと歩き振り返る。

まるで、歌舞伎役者のような動作をする紗香。

紗香「とざい、とーざい！」

紗香、ナイフを手に持ち、振りかざす。

紗香「我こそは、女剣士さやかだ！ 今か

ら、人間様に憑りつく悪魔の成敗だ、成敗だくあ、尋常に、勝負、勝負うく」

紗香、サバイバルナイフをクルクルと天空に放り投げ、見事にキャッチする。

紗香、歌舞伎役者の様に、ぎろつと俊也に目を向ける。

紗香「俊ちゃん……楽しかったよ……」

ジッと俊也を見詰める紗香の目から、涙が、ひとしずく落ちる。

俊也「えっ？！何を言っているんだ？」

紗香「（振り絞る声）……俊也さん……ごめんなさい……」

紗香の目に涙が溢れている。

俊也「如何したんだ？ 紗香！？」

紗香「俊也さん：これが現実の：：私です」

紗香、着物から片手で、注射器と白い

葉の小袋を取り出し、俊也に翳す^{かざ}。

俊也「覚醒剤！？：：如何いう事だ？ 如何し

てだ！」

失意の紗香、注射器と覚せい剤を地面に落とす。

紗香、ゆっくりとサバイバルナイフを

自分の腹に体に突き刺す。

— うっ—、うっ— —

紗香、呻き声の中で苦しみながら、ナ

イフを抜き再び、腹に差し込む。

吹きだす血。

紗香が崩れ落ちて行く。

俊也「！」

唾然とする俊也。

× × ×

俊也が見詰めている。

血に塗れた^{まみ}、紗香の無残な死体が、6
0年前の、母の無残な死体とダブリ重

なる。

俊也、紗香の死体を担ぎ上げる。

○同・崖つぶち（夜）

月夜に照らされる黒い荒波が、太平洋の果てまで連なっている。

見詰めている俊也に紗香の死体が寄り掛かっている。

俊也「母さん、トノサマバツタは、女性だったよ。紗香だよ……綺麗だろ、可愛いだろ……今、連れて行くから……」

× × ×

俊也、紗香を担ぎ上げて来て、ワゴン車の助手席に降ろす。

俊也、後部席の黒いバッグと木刀を手に持ち、怒りの叫び声を上げ、駆けだす。

俊也「うあー！うお！」

狂ったように、バッグの御札おきつを、浜風の強風に撒き上げる俊也。

一万円札が浜風に舞い、流され消えて行く。

× × ×

俊也が木刀を振り回し、狂ったように乱舞している。

立ち尽くしている俊也、地面に落ちている、注射器を見る。

唇を噛み締めた俊也の眼に、悔し涙が浮かぶ。

俊也「おまえだ！ おまえが！ 紗香の人生を滅茶苦茶にしたんだ！ 馬鹿野郎が！」

俊也、渾身の力を込めて木刀を振り下ろす。

注射器が粉々に散り上がり、バキッと
いう音と共に、木刀の破片が空に飛ぶ。

○同・ワゴン車の中（夜）

俊也、助手席の、血塗られた紗香の腹にノートパソコンを載せ、シートベルトで締め付ける。

俊也、自分の腹に、壊れたビデオカメラを載せ、シートベルトで締め付ける。

俊也「未だ、映画は完成して無いからな……」

× × ×

俊也、指輪を紗香の指に嵌め、自分の指にも指輪を嵌める。

二つの指輪は、キラキラと輝いている。

俊也、左手で紗香の手を握り、唇を噛み締める。

俊也「紗香、行くよ！」

星空の下、ワゴン車が、ゆっくり動き出し加速して行く。

ワゴン車は、崖の丘から空を舞い、静かに消えて行った……

○同・絶景の丘（夜明け）

丘の上から、見渡せる海原に朝陽。

太平洋の果てまで続く穏やかな海波が、オレンジ色に、キラキラと輝いている。

… 完 …